キリストの花嫁

ブライダル・パラダイム

空知太栄光キリスト教会牧師　銘形 秀則

シリーズ「キリストの花嫁」No.1(改定)

「来てください。」

【聖書箇所】ヨハネの黙示録 22 章 17 節

ベレーシート

●聖霊の導きに従って、聖書的な「キリストの花嫁」についてランダムに(=思いつくままに)取り上げて行きたいと思っています。その最初に取り上げるのは、ヨハネの黙示録の最後の章(22 章)にある「見よ、わたしはすぐに来る。」と語る花婿に対する花嫁のことばー「来てください。」―です。新約聖書の最後の書であるヨハネの黙示録から取り上げるのは、「**終わりには、永遠の始まりがある**」というすばらしい希望があるからです。私たちはこの希望に満ち溢れていなければなりません。

●礼拝前に流れている CD の曲をお聞きになっていると思いますが、そこに流れている曲は Terry MacAlmon(テリー・マッカルモン)という方が作詞・作曲された“Even so”というタイトルの曲です。とてもすばらしいメロディーです。出だしは、Even so come Lord Jesus come と歌われます。これはキリストの花嫁の声です。以前、私はこの曲を訳して歌いたいと思いましたが断念しました。それは英語の Even so という言葉をどうしてもうまく訳せなかったからです。Even so とは、「そうです、そのとおりです、・・でも、どうか」といったニュアンスなのですが、日本語の言葉にして歌えない英語の独特な表現らしいのです。ギリシア語原文のネストレ 27 版にはその Even so に当たる言葉は無くなっているのですが、それまでの原本ではギリシア語で「ナイ」(ναὶ)という言葉が入っていたのですが、この「ナイ」に当たることばが英語の Even so なのです。この言葉がヘブル語になると「ナー」(נָא)となるのですが、その「ナー」という言葉から、最近になって、Even so とは「どうか」(please)というニュアンスだと理解できたのです。「しかり、わたしはすぐに来る」という花婿の声に対して、花嫁が「はい。そのとおりです。分かっています。でも、どうか、少しでも早くおいでください。いつもあなたをお待ちしていますから」というニュアンスなのです。花嫁の花婿に向けられたこの待望のことばで新約聖書は終わっているのです(最後の節の祝祷のことばを除けばですが・・)

1. 花嫁は「ひとり」(単数)

●最初に取り上げなければならない重要な事柄は、花嫁はひとりであるということです。聖書の「キリストの花嫁」は複数の「花嫁たち」ではなく、単数の「花嫁」だということです。「ひとりの花嫁」です。これは重要なことです。「花嫁」とは教会のことですが、一人の花嫁として表わされています。世界中の多くのクリスチャンたちは、一人の「花嫁」なのです。まずはこの感覚を私たちの心に深くなじませる必要があります。男性はこの概念になじむのに少々難しさを覚えるかもしれませんが、繰り返し、瞑想を深めていくことで、それが自分にとって重要な表象であることに気づかされていくと思います。

●「キリストの花嫁」はすべてのクリスチャンの集合体です。教会は聖書の中で以下のようにさまざまなイメージで表現されています。「一人の牧者を持つ**羊の群れ**」、「ぶどうの木の幹につながる**枝々**」、「ひとつの礎石を持つ**建物**」、「かしらと**からだ**(肢体)」、「一人の王とその**民**」、そして、「一人の花婿とその**花嫁**」です。

●教会を表象するこれらのなかでも、特に、「キリストの花嫁」という表象は、神学的な用語を使うならば、以下のように三つの領域を含んでいます。

(1) 救済論とは、キリストの贖罪による義認、聖化、栄化を含む領域。
(2) 教会論とは、神のご計画において奥義として啓示されたキリストと教会の関係を含んだ領域。
(3) 終末論とは、神のご計画における完成へのプロセスとその成就について扱われる領域。

●これらの三つの領域を「キリストの花嫁」はカバーしています。ですから、これから「キリストの花嫁」を瞑想していくときに、おのずとこれらの領域と関係することになるのです。

2. 「わたしは・・来る」という花婿の声

●ヨハネの黙示録 22 章には三度、花婿の声が記されています。その内容は微妙に異なるところもありますが、ほとんど同じです。

(1) 7 節 「見よ、わたしはすぐに来る。」・・・イエシュアのことばを御使いが代弁している
(2) 12 節「見よ、わたしはすぐに来る。」・・・イエシュア自身のことば
(3) 20 節「しかり、わたしはすぐに来る。」・・イエシュア自身のことば

●ここでひとつの突っ込みをしたいと思います。「わたしはすぐに来る」という表現。この表現になにか違和感を持ちませんか。この表現を不思議に感じませんか。感じない方もいると思いますが、私は違和感を持つのです。「わたしは来る」という表現はギリシア語では「エルコマイ」(ἔρχομαι)という語彙です。一人称現在形で使う表現です。未来形ではなく現在形です。今すぐにでも行こうとしているところだというニュアンスです。英語も I come と訳しています。今、花婿であるイエシュアはどこにいるのでしょう。天におられるとすれば、「わたしはすぐに来る」ではなく、「行く」ではないでしょうか。実際、「エルコマイ」(ἔρχομαι)は、来る、行く、いずれにも使われます。ところが多くの聖書はこの部分を「わたしはすぐに行く」とは訳さないで、「来る」と訳しています。ここが私には謎なのです。

●ヨハネの福音書 14 章で、イエシュアは次のように言われました。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 14 章 1～3 節

1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。
2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、
と言ったでしょうか。
3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。
わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

●ここでは「**行く**」「**来る**」ということがはっきりしています。イェシュアがまだ地上におられたとき、弟子たちに語ったことばですから、地上の側から語っています。ですから、「行って」また迎えに「来る」わけです。しかし黙示録の場合、御子イェシュアは今、御父の家にいて弟子たち(花嫁)を迎える準備をしているわけです。御子は御父のゴーサインがあってはじめて迎えに来ることができます。迎えに来る空中再臨の時期がいつなのか分からないのはそのためです。父の家の側からすれば、私たちを迎えに「来る」ではなく、迎えに「行く」となるのではないでしょうか。黙示録 22 章の花婿は天の御父の家にいて、花嫁は地上にいます。花嫁側からならば、花婿に迎えに「来てください」となりますが、花婿側からすれば、花嫁を迎えに「行く」とならないでしょうか。「行く」「来る」という日本語の表現は、その動詞を使う主体によって使い方が異なっています。ところが不思議なことに、ギリシア語とヘブル語は「行く」も「来る」も同じことばなのです。

●このようなところに突っ込みを入れても、花婿が花嫁を迎えに来ることは事実なのですから、すべて「来る」で通しても構わないと言えばそれまでです。何よりも、花婿を待つ**花嫁**に強調点が置かれているということにしたいと思います。

3. 「すぐに」という表現

●次に、「わたしはすぐに来る」というフレーズの中の「**すぐに**」ということばに目を留めてみたいと思います。「すぐに」と訳されたギリシア語は「タキュス」(ταχύς)で、タクシーはここから派生したのではないかと思いますが、どうでしょうか。「遠からず、遅からず、すぐに」という意味です。あるいは神のご計画では絶妙なタイミングなのだと思いますが、そのように信じない人々にとっては、「盗人」のように来ると言えます。信じている私たちにとっても、実はこの「すぐに」ということばは「惑わし」となることがあります。いまだ花婿は花嫁を迎える準備中なのです。準備ができたら迎えに来てくださるのですが、人によっては、結構、「準備が長いなー」という感じを持っている人も少なくないと思います。「急いで準備を終えて、早く迎えに来てください。」と思ったとしても無理はありません。なぜなら、どうしても私たちはこの「すぐに」ということばを人間の感覚で受け取ってしまいやすいからです。「すぐに」ということばを正しく理解する必要があります。それは、神の時計で考えてみる必要があるということです。

●「すぐに」とは、「神のご計画における絶妙なタイミングで、しかもそれは、少しも狂いがなく、なされること」と理解するとすれば、私たちはその絶妙な神のタイミングにいつも私たちの時計を合わせていることが必要となります。それはどういう意味でしょうか。

●「終わりの日」や主の再臨の教えについては、今日いろいろな説や考えがあるために、それを語ると人が混乱してしまうのではないかと心配して、そのことについて話さない牧師もいるようです。主の再臨の話をすると、現実の問題を解決するのに精一杯なのに、そういうことまで勉強しなければならないのかと思われる信徒もおられるかもしれません。今生きる力を必要としているのに、何か明後日のことを話されても・・・。そのような人たちは、主の再臨の教えを、あたかも難しい教理、現実の問題とは別のこと、と思われているかもしれません。日常的なことに心がいっぱいになっていて、主の再臨の話は日常生活とは別の世界のことだと思われているとすれば、日常生活そのものもゆがんでくるということを知らずにいるのです。

●イエシュアは「人の子の到来はノアの日と同じように実現するのです。」(【新改訳 2017】マタイ 24:37)と言われました。人々はノアが箱舟に入るその日まで、「食べたり飲んだり、めとったり嫁いだり」していました。つまり、普通の生活をしていたのです。ここで指摘されているのは、人々が神のご計画と予告のことばに対して全く無関心で、日常生活に浸りきっていたことです。神はノアを通して「義を宣べ伝え」(Ⅱペテロ 2:5)ておられたのですが、人々はそのことに無関心でした。あるいは、主の警告を無視して、そのことを否定していた者もいたと思われます。

●使徒ペテロは、「主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです」(Ⅱペテロ 3:8)と述べています。これが神の世界の単位です。ですから「すぐに来る」と神が言われても、人間の時間感覚ではなく、神の感覚で理解しなければなりません。「遅くなっても」という表現も私たちの感覚で理解しようとするならば、ある人々のように、「彼(キリスト)の来臨の約束はどこにあるのか。・・・すべてが創造のはじめからのままではないか。」(Ⅱペテロ 3:4)と言い張るのです。そのような者は、心のまっすぐでない者で、「心高ぶった」者なのです。「終わりの日」に向かって行くこれからの時代は、「人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、真理から耳を背け、作り話にそれていくような時代になる」(Ⅱテモテ 4:3～4)ゆえに、ますます伝道困難な時代になると聖書は述べています。今一度、私たちは神のご計画のマスタープランを知り、今、「**すぐに**」、私たちの時計を神の時計に合わせるべきではないかと思います。

4. なにゆえに、「御霊」と「花嫁」なのか

●今回の最後のこととして、黙示録 22 章 17 節にある「御霊と花嫁が言う。『来てください。』」というフレーズにある「御霊と花嫁」ということばに注目したいと思います。花嫁だけでなく、なにゆえに「御霊」なのでしょうか。「御霊と花嫁」の関係とはどういう関係なのでしょうか。

●アブラハムが自分の息子イサクの花嫁を見つけるために、最年長のしもべであるエリエゼルを遣わした話が創世記 24 章に記されています。息子イサクの嫁探しです。イサクにどのような妻を迎えるかはアブラハムにとって大きな問題であり、生涯の最後の課題ともいうべきものでした。アブラハムは信仰をもってエリエゼルを自分の生まれ故郷(といってもここではハランを意味しています)に遣わして、そこでイサクにふさわしい嫁を探すようにと託しました。

●この課題のためには、アブラハムのしもべ(エリエゼル)とリベカ、そしてリベカの母と兄(ラバン)に対する**神の導きが必要**でした。24 章はこれら三者が神からの導きを確信する必要があったことが記されています。この導きは、キリストの花嫁に置き換えるならば、ふさわしいキリストの花嫁は御霊の導きが必要であるということの例証なのです。人間的な判断ではなく、御霊の導きによる花嫁でなければならないのです。この場合、アブラハムとイサク、そしてエリエゼル(=「神の助け」)は、御父と御子と御霊の関係の型を予表しています。イサクにふさわしい花嫁が与えられたのは、エリエゼルを型とする**御霊の導き**なのです。ですから、キリストの花嫁と御霊は密接な関係にあると言えます。キリストの花嫁を花婿にふさわしく整えるのも、花嫁の傍らにいつも寄りそっておられる御霊なのです。ですから、「**御霊と花嫁が言う。『来てください。』**」となるのです。

●さらにすばらしいことは、17 節の後半です。そこにはこう記されています。

【新改訳 2017】黙示録 22 章 17 節後半
これを聞く者も「来てください」と言いなさい。渇く者は来なさい。
いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。

●「これを聞く者」とは、花婿を待ち続けるその美しさに心打たれる者のことです。つまり、まだ救われていない者に対して、同じく「来てください」という者になるように呼びかけているのです。「渇く者は来なさい。」という呼びかけは、かつてイエシュアが仮庵の「祭りの終わりの大いなる日に」、つまり、「八日目に」大声で人々に語ったことばです。「渇き」とは人間が生きるために満たされなければならない最も根源的な欲求です。黙示録では「いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。」とありますが、ヨハネの福音書に記されているイエシュアの言葉は、以下のことです。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 7 章 38 節
わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。

●このことばは、最後の最後まで、キリストの花嫁として導かれる者たちへの招きなのです。それは、最後の最後までキリストの花嫁となるチャンスは開かれていることを意味しているのです。とすれば、すでにキリストの花嫁とされている者はますます真剣に花婿に対して、真実に「来てください」と言わなければなりません。なぜなら、その姿には永遠の愛の美しさをあかしする秘めた魅力があるからです。またその先には、永遠の新しいはじまりを予感させる生ける希望があかしされているからなのです。

2015.6.14
改定 2018/11/8

シリーズ「キリストの花嫁」No.2(改定)

ブライダル・パラダイム（1）

【聖書箇所】　詩篇 27 篇 4 節

ベレーシート

●前回から、「キリストの花嫁」というシリーズを始めました。上の「花嫁」の写真の中に、瞑想すべき内容が多く隠されているように思います。今回、「ブライダル・パラダイム」とタイトルをつけさせていただきましたが、**「ブライダル・パラダイム」ということばの意味は、神と人とのかかわりを「花婿と花嫁」という視点で見る見方のことです**。聖書においては、キリストと教会のかかわりが、以下のようにいろいろな比喩で表現されています。

①キリストのからだなる教会・・キリストをかしらとし、教会をそのからだとする。調和と一致のイメージ。
②神の民としての教会・・・・ キリストを王とし、教会をその民とする。統治形態のイメージ。
③神の宮(建物)としての教会・ キリストを建物の土台、あるいは要石とし、教会はその土台の上に建てられる。
④新しい聖なる都エルサレム・ 神と人とが永遠に共に住む場としての都。回復されたエデンの園のイメージ。
⑤神の家族としての教会・・・ 同じ御父を持ち、御子を長兄とする兄弟姉妹としての家族のイメージ。
⑥キリストの花嫁なる教会・・ キリストを花婿とし、教会はその花嫁としてやがて一つになる。結婚のイメージ。

●神と人とのかかわりを「花婿と花嫁」という視点から見るという「ブライダル・パラダイム」は、今日の教会において最も欠落しています。「ブライダル・パラダイム」における**花嫁の霊性**は、奉仕とか働きというよりも、神を知ること、神を愛することを喜びとし、そのことを何よりも大切にした世界です。つまり、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして主なる神を愛する」という第一戒に生きる世界です。それは主のために仕えることを第一義とするマルタではなく、主の前にすわって主の語られることばを聞くという**マリアの霊性**です。あるいは、「一つのことを私は【主】に願った。それを私は求めている。私のいのちの日の限り【主】の家に住むことを。【主】の麗しさに目を注ぎその宮で思いを巡らすために。」(【新改訳 2017】詩 27:4)と歌った**ダビデの霊性**なのです。ダビデの霊性も、マリアの霊性も、みな「花嫁の霊性」につながっているのです。それをより強く意識するために、「ブライダル・パラダイム転換」ということばを使いたいと思います。実は、このことは当教会がこれまでずっと目指してきた霊性なのです。日々の「サムエル・ミニストリー」も、ヘブル的視点から聖書を読み直して「御国の福音」を余すところなく論証していくことも、「ヘブル・ミドゥラーシュ」もすべて、「ブライダル・パラダイム転換」の取り組みなのです。これを、「アウトプット志向からインプット志向への転換」という言い方もできます。

●今年(2015)の秋(9/27～10/4)に初めてもたれる「セレブレイト・スッコート」の祝祭の基調となる概念は「花嫁の霊性」であり、「ブライダル・パラダイムの確立」を目指す取り組みなのです。「花婿なる方を心から愛し、その花婿が迎えに来るのをひたすら待ち望む花嫁」の霊性は、神に愛される喜び、神を愛する喜びとして私たちの心をかき

立てることと信じます。そのためにも、花嫁の写真を通して、そこから多くのインスピレーションを与えられたいと願っています。「キリストの花嫁」というタイトルの歌をこれから毎日のように歌っていきます。これは「セレブレイト・スッコート」のテーマ曲です。歌詞をここに掲載しておきますので、この歌詞を瞑想のテキストとして用いてください。この歌詞はキリストの花嫁の姿を実に端的に表わしていると思います。また、メロディもすばらしいです。

私の愛する方　何と美しく慕わしい
この身も　この心も　すべてあなたのもの
花嫁は待っています　花婿が来られるのを
いつの日か顔と顔を合わせ　みそばに行く日まで
あなたを愛しています　あなたのすべてが愛(いと)しい
心尽くし　御霊も花嫁も待ち望む
来てください　来てください　花婿イェシュアよ

●天におられる花婿なるキリストの姿をさらに深く知るために、この歌詞をもとに、「キリストの花嫁」をシリーズとして取り上げていきたいと思います。

1.　花婿に愛され、喜ばれていることを知る花嫁

●歌詞の中に「**私の愛する方**」という表現があります。これと全く同じ表現が聖書の中に繰り返し出てくる書があります。それは「雅歌」です。なんと 20 回です。その中のひとつである 1 章 16 節には、「私の愛する方。ああ、あなたはなんと美しく、慕わしい方。」とあります。「キリストの花嫁」の賛美の第一行目にあるフレーズと同じです。つまりこの歌は、「雅歌」に記されている花嫁の愛の告白なのです。

●今、「サムエル・ミニストリー」では「ゼパニヤ書」を瞑想していますが、その次は旧約聖書の最後の書である「マラキ書」です。その後に「雅歌」を取り上げてじっくりと瞑想して行く予定です。おそらく「雅歌」はそれほど真剣に読まれる書ではないと思います。しかしそこに描かれているのは、単なる男と女の愛の歌ではなく、花婿と花嫁の愛の歌なのです。この「雅歌」を味わっていくときにも「ブライダル・パラダイム」が必要です。それによって多くのことが啓示されると今から期待していますが、「雅歌」の「私の愛する方」という表現の中から四か所をピックアップしてみたいと思います。

【新改訳 2017】雅歌
1:16 私の愛する方。ああ、あなたはなんと美しく、慕わしい方。私たちの寝床も青々としています。
2:10 私の愛する方は、私に語りかけて言われます。「わが愛する者、私の美しいひとよ。さあ立って、出ておいで。」
2:16 私の愛する方は私のもの。私はあの方のもの。あの方はゆりの花の間で群れを飼っています。
7:10 私は、私の愛する方のもの。あの方は私を恋い慕う。

●特に、2 章 10 節の「私の愛する方は、私に語りかけて言われます。『わが愛する者、私の美しいひとよ。さあ、立

って、出ておいで。』」という表現は重要です。なぜなら、花嫁が花嫁としてのアイデンティティをしっかりと持ち、それを保つためには、自分が「愛されている存在」だという意識がきわめて重要だからです。すべてはこの意識からはじまるのです。もし自分が愛されているという意識が希薄であれば、神を愛する喜びも希薄となってしまうのです。

●パトモス島に島流しにされた使徒ヨハネは、そこでひとり、神を礼拝していた時に天が開かれて天上の光景を見た人です。そのヨハネがそのことを「ヨハネの黙示録」に記しているのですが、4 章 11 節に、24 人の長老が御座に着いている方の御前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を拝み、自分たちの冠(殉教によって与えられた冠)を御前に投げ出して次のように言っているのを見、そして聞きました。

【新改訳 2017】黙示録 4 章 11 節
「主よ、私たちの神よ。あなたこそ栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたが万物を創造されました。
みこころのゆえに、それらは存在し、また創造されたのです。」

●「みこころのゆえに」とは、「あなたの目的にかなって」とか、「あなたの喜びのままに」とも訳せることばです。ヘブル語では「みこころ」に「ラーツォーン」(**רָצוֹן**)という語彙を当てています。この「ラーツォーン」という語彙は「神から喜びをもって受け入れられている」こと、いわば「神のお気に入り」を意味するのです。ましてや、「キリストの花嫁」は花婿の喜びの対象であることは言うまでもありません。すべての被造物は「はなはだ良かった」という神の創造の感動の下に存在しており、とりわけ「キリストの花嫁」は神の満足される、お望みどおりの実に美しい存在なのです。この信仰こそ、「キリストの花嫁」のアイデンティティの根を太いものにしていきます。そしてこのアイデンティティは、神とのかかわりにおいてさらなる成熟への憧憬(あこがれ)を抱かせるのです。

●使徒パウロという人は、キリストを知ってから次のように述べています。

【新改訳 2017】Ⅱコリント 5 章 16～17 節
16 ですから、私たちは今後、肉にしたがって人を知ろうとはしません。かつては肉にしたがってキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。
17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

●キリストにあって、自分は神のみこころにかなった、喜びの対象なのだという認識が与えられたときに、パウロという人の真の美しさが輝き出るようになったのです。これが「新しく造られた者」の姿なのです。キリストなしには、人はやみの中にいるようなものであり、神が本来意図された輝きを放ってはいないのです。神のキリストによる救いの目的は、神が「はなはだ良かった」とする存在へと回復させるためでした。回復させるだけでなく、その全生涯において、神の「トーヴ」(**טוֹב**)が追いかけて来るのです。

●ダビデもそのことを確信していました。ですから、「まことに私のいのちの日の限り**いつくしみ**(「トーヴ」(**טוֹב**)と**恵み**(「ヘセド」(**חֶסֶד**)=不変の愛)が私を追って来るでしょう。私はいつまでも【主】の家に住まいます。」(【新

改訳 2017】詩 23:6)と告白できたのです。ダビデの輝きの生涯はまさにその確信から来ているのです。

●「キリストの花嫁」である私たちは、この確信がキリストの御霊の助けによって与えられるのです。雅歌 2 章 10 節の「 私の愛する方は、私に語りかけて言われます。『わが愛する者、美しいひとよ。さあ、立って、出ておいで。』」という花婿の声は、御霊の助けによってはじめて聞き取ることができるのです。御霊の働きは花婿の声を花嫁に聞かせることで、花嫁をより美しく輝かす力を与えます。ここでの力は何かの働きをさせる力ではなく、愛されていると確信させる力です。その愛の力によって、「私は、私の愛する方のもの。あの方は私を恋い慕う」(雅歌 7:10)というかかわりを告白することができるのです。

【新改訳 2017】雅歌 8 章 6～7 節
6 封印のように、私をあなたの胸に、封印のように、あなたの腕に押印してください。愛は死のように強く、
ねたみはよみのように激しいからです。その炎は火の炎、すさまじい炎です。
7 大水もその愛を消すことができません。奔流もそれを押し流すことができません。
もし、人が愛を得ようとして自分の財産をことごとく与えたなら、その人はただの蔑(さげす)みを受けるだけです。

●ここには「愛の力」のすさまじさが語られています。花婿なる主は、私たちに対する燃えるような愛を心に抱いておられるということです。大水もその愛を消すことができないのです。御父が御子に永遠の愛を共にする結婚のパートナーを与えるために、人としてこの世に遣わされました。この世での御子イェシュアの十字架の死は、私たちに対する「**驚くべき求愛行為**」でした。御子イェシュアの十字架の上で流された血潮(血の杯)を受け取った者はみな、花婿としてのイェシュアの求愛行為を受け入れた花嫁となったのです。御霊は花婿の友人としての役割を担っています。花婿の友人としての務めとは、花嫁候補の目を開いて、花婿のすさまじい愛に気づかせることです。

●「キリストの花嫁」という「ブライダル・パラダイム」に秘められた啓示は、神とのかかわりにおいて、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして主なる神(花婿)を愛する」という神の第一戒を回復させる力となると信じます。それは、花嫁である教会に大きな変革をもたらす鍵となります。

2. 花婿の「麗しさ」を見出そうとする花嫁

【新改訳 2017】詩篇 27 篇 4 節
一つのことを私は【主】に願った。それを私は求めている。私のいのちの日の限り【主】の家に住むことを。
【主】の麗しさに目を注ぎその宮で思いを巡らすために。

【新改訳改定第三版】
私は一つのことを【主】に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、【主】の家に住むことを。
【主】の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。

●自分の生涯において最も優先すべきことが明確な人は、周囲の流れに流されないで歩むことができます。人はみな

自分の価値観で物事を考え、そして行動しています。ダビデは、主にあって最も大切な事柄を自分の人生の土台として生きることができるように、まず主に願い、そしてそれを求めました。キリストの花嫁の霊性のモデルであるダビデが願い求めた「一つの願い」(One Thing)は、主の「**麗しさ**」に目を注ぎ、それによって心が魅了されることでした。そのためにダビデは優先的にそのことを切に「求めた」のです。これこそ聖なる最高レベルの楽しみです。ある何か(人や事柄)に、心が奪われたり、驚きや感動を覚えたり、魅了されたりするということは決して悪いことではありません。それは、神が本来人間の中に埋め込んだ「思い」(願いや欲求)なのだと信じます。しかし人間の罪はそうした思いを誤った方法で満たそうとします。神のうちにあるものではなく、この世におけるさまざまなものによって満たそうとします。

●ところで、「麗しさ」と訳されたヘブル語は「ノーアム」(**נֹעַם**)で、英語だと The beauty です。冠詞がついているのは「主の麗しさ」を意味しているからです。原文では「ノーアム・アドナイ」(**נֹעַם־יהוה**)となっています。「ノーアム」は聖書ではこの箇所が初出箇所です。聖書全体では 6 回しか使われていませんが、主の「麗しさ」が、他では「恵み」「慈愛」「喜び」「好意」「楽しさ」「親切」とも訳されています。ダビデは主のそのような面を見出すことができ、それによって心が満たされるように願ったのです。

●花嫁の務めは、花婿の「麗しさ」、あるいは「美しさ」を見出すことです。そしてそのことを何よりも喜びとすることです。そのためにはそれを求めなければなりません。なぜなら、求めなければ得られないからです。花嫁が花婿を慕い求めるということは、花婿の「麗しさ」を発見することなのです。

●このところ、サムエル・ミニストリーでは「ゼパニヤ書」を瞑想しています。その書はユダとエルサレムに対して「すべてのものを取り除く（一掃する）」というとても厳しいさばきを語っています。なぜ、神がユダのエルサレムに住む人々に厳しいさばきをするのか、その理由が記されています。それによれば、**主を尋ね求めず**、**主を求めない**からなのです。逆に言うならば、主を尋ね求めること、主を求めることが、神を喜ばせることだと分かります。
実は、主を「尋ね求める」「求める」ことこそが、**花嫁の霊性**なのです。主は、この霊性をユダの民が回復することを求めておられるのです。偶像礼拝、混合宗教の危険性はなんとなく生ずるのではなく、花嫁の霊性を失う時に入り込んで来るのです。

●預言者ゼパニヤが活躍した時代には、ダビデのように「主を求める」者はいなかったことが強調されています。マナセ王とアモン王の 57 年間もの治世にわたって、神の民が自分たちの生存と防衛の保障を神に求めることなく、大国アッシリヤに求めていたのです。これは神の心を痛める行為でした。神の教えを記した「トーラー」もしまい込まれ、神のみことばが聞かれない時代が続いたのです。つまり、神のいのちの通路を塞いでしまっていたのです。そのような状況の中で主は、もし「主を求める」ならば、激しい怒りから「かくまう」と約束されたのです。おそらく「主を求める」者たちが、バビロンの捕囚の地で神のトーラーを回復させ、神を見出すに至ったと考えられます。

●「尋ね求める」と訳されたヘブル語は「ダーラシュ」(**דָּרַשׁ**)で、「求める」と訳されたヘブル語は「バーカシュ」(**בָּקַשׁ**)です。ここで、聖書における「渇望用語」を記してみたいと思います。それらはみな「**花嫁の霊性**」を表わす語彙としてきわめて重要です。

(1) 「バーカシュ」(בָּקַשׁ)

●「バーカシュ」は「渇望用語」の中で最も多く使われている語彙(225 回)ですが、とりわけ、**心情的**な面において求めるところに特徴があります。たとえば、「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている(בָּקַשׁ)。」
新約に「まず神の国と神の義を**求めなさい**。」(マタイ 6:33)とありますが、ここの「求める」をヘブル語にすると「バーカシュ」です。同じく「**求めなさい**。そうすれば与えられます。」(マタイ 7:7)の「求める」も「バーカシュ」です。

(2) 「ダーラシュ」(דָּרַשׁ)

●「ダーラシュ」の使用頻度は 165 回です。「バーカシュ」が心情的であるのに対して、「ダーラシュ」は**理性的**です。つまり、神に尋ね求め、問いかけ、調べて、そこにある神の秘密を掘り起こすような求めです。詩篇 9 篇 10 節には「御名を知る者はあなたに拠り頼みます。【主】よ。あなたはあなたを**尋ね求める**(דָּרַשׁ)者をお見捨てになりませんでした。」とあります。すばらしい約束ではありませんか。ちなみに、「ダーラシュ」(דָּרַשׁ)のギリシア語訳は「ゼーテオー」(ζητέω)です。「バーカシュ」のギリシア語訳は「エクゼーテオー」(ἐκζητέω)です。ギリシア語では「ゼーテオー」の使用頻度の方が「エクゼーテオー」のそれよりもまさっています。ヘブル語の使用頻度と逆です。

(3) 「シャーアル」(שָׁאַל)

●「シャーアル」は「尋ねる、願う、求める」という意味で、詩篇 27 篇 4 節の「私は一つのことを主に**願った**」で使われています。使用頻度は 183 回です。イスラエルの最初の王であったサウルは「シャーウール」(שָׁאוּל)と書きます。その意味は「主に尋ね、主に求める」ということですが、サウルは自分の名前に啓示されていることを実現できませんでした。使徒パウロのヘブル名は「サウル」です。サウル王と同じベニヤミン族の出身で、しかも同じ綴りの名前「シャーウール」(שָׁאוּל)です。使徒パウロは、最初は主に逆らっていましたが、後にはだれよりも主を尋ね求める人となり、神の奥義を啓示された人です。

(4) 「シャーアフ」(שָׁאַף)

●「シャーアフ」は「あえぐ、あえぎ求める、熱望する、切望する」という意味で、詩篇 119 篇 131 節「私は口を大きく開けて**あえぎます**。まことに私はあなたの仰せを慕います。」【新改訳 2017】)で使われています。「シャーアフ」(שָׁאַף)使用頻度は 14 回です。

●コロサイ人への手紙 3 章 1 節に「上にあるものを求めなさい。」とありますが、ここでの「**求める**」のヘブル語は「熱望する、切望する」という意味の「シャーアフ」(שָׁאַף)が使われています。

(5) 「シャーハル」(שָׁחַר)

●「シャーハル」は、「真面目に、熱心に、本気で、神を求める(捜し求める)」という意味です。使用頻度は 13 回。詩篇 63 篇 1 節の「神よ あなたは私の神 私はあなたを**切に求めます**(שָׁחַר)。水のない 砂漠の衰え果てた地で 私のたましいは あなたに渇き 私の身も あなたをあえぎ求めます(כָּמַהּ)。」で使われています。また、箴言 8 章 17 節の「わたしを愛する者を、わたしは愛する。わたしを**熱心に捜す**(שָׁחַר)者は、わたしを見つける。」でも使われています。

(6) 「カーマー」(כָּמַהּ)

●「カーマー」は「恋慕う、恋こがれる」という意味で、詩篇 63 篇 1 節の後半にある「水のない、砂漠の衰え果てた地で、私のたましいは、あなたに渇き、私の身も、あなたを**あえぎ求めます**(改定第三版では「**慕って気を失うばかり**」に使われています。使用頻度は 13 回です。

(7) 「アーラグ」(עָלַג)

●詩篇 42 篇 1 節に「鹿が谷川の流れを**慕いあえぐ**ように　神よ　私のたましいはあなたを**慕いあえぎます**。」(【新改訳 2017】)とあります。その切望感と希求性は、神への強烈な渇きのゆえです。使用頻度は 3 回と少ないのですが、生ける神を求める希求性の強い語彙と言えます。もし、この渇きの満たしを神以外のものに求めるとすれば、希求性は減少することになるでしょう。

ベアハリート

●聖書における「渇望用語」は「ダビデの霊性」、「マリアの霊性」であると同時に、「花婿を慕う花嫁の霊性」なのです。今日の教会は御霊の助けを通してこの霊性を回復し、自分たちのものとしなければなりません。なぜなら、この霊性は神の第一戒である「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」が実現することにつながるからです。

●終わりの時代(終末)には、より速度を増して、神の秘密が開かれてくる時代となります。なぜなら、神を慕い求める霊的な渇きの時代になるからです。ですから、私たちも神の秘密を「しつこく尋ね求める」花嫁とならなければなりません。主を尋ね求める花嫁にこそ、神はご自身の秘密を明かされるからです。

2015.6.28
改定 2018/11/8

シリーズ「キリストの花嫁」No.3(改定)

ブライダル・パラダイム
(2)

【聖書箇所】詩篇 27 篇 4 節

ベレーシート

●今回は、シリーズ「キリストの花嫁」の第三回目です。**神と人とのかかわりを「花婿と花嫁」という視点から見る見方を「ブライダル・パラダイム」**と称して、前回は、花嫁の霊性の特徴についてお話ししました。その霊性の特徴は、何よりも神を知ること、神を愛することを喜びとし、そのことを何よりも大切にすることです。つまり、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして主なる神を愛する」という第一戒に生きる世界であり、主の前にすわって主の語られることばに耳を傾けるというマリアの霊性、あるいは、「一つのことを私は【主】に願った。それを私は求めている。私のいのちの日の限り【主】の家に住むことを。【主】の麗しさに目を注ぎその宮で思いを巡らすために。」(新改訳 2017、詩篇 27:4)と歌った「ダビデの霊性」ともつながるのです。

●昨日の「サムエル・ミニストリー」(2015/7/11)ではマラキ書の 2 章を瞑想しました。マラキ書は旧約聖書の最後にある預言書です。この預言書が書かれてからバプテスマのヨハネが現われるまでの約四百年間、預言者を通して主のことばが語られることはありませんでした。この神の沈黙が何を意味するのか。神のご計画においてはそこにも秘められた必然性が隠されているはずです。しかしそれはともかくとして、マラキ書の中で糾弾されているのは「祭司たち」だということが重要なのです。なぜなら、本来の「祭司の務め」は働くことではなく、神の臨在の中で過ごすこと、神を仰ぎ見、顔と顔とを合わせて、神を知ることだからです。

●「祭司」と同時に「王」の務めは、人間が神によって創造された時から人間に与えられた務めです。最初の人アダムはエデンの園においてその務めを果たしていたのです。そもそも人間は神のかたちとして造られましたが、その神のかたちとは三位一体なる神が持っているかたちです。そのかたちとは愛のかかわりであり、それは互いを知るという関係です。三位一体なる神(御父・御子・御霊)のゆるぎない永遠の愛の交わりこそ神のかたちであり、そのかかわりに似せて人が造られたとすれば、人にもその務めが反映されていることは言うまでもありません。その務めを別のことばで言うならば、「祭司としての務め」と「王としての務め」なのです。後に、神の民イスラエルが「王である祭司」、あるいは「祭司の王国」と呼ばれるのはそのためです。「祭司の務め」と「王の務め」が健全に果たされるべく立てられたのが後に登場する預言者です。これら三者の務めが正しく機能することによって神の創造のみこころが地上になされるのです。人間の「祭司としての務め」とは、「顔と顔を合わせて」(「パーニーム・エル・パーニーム」פָּנִים אֶל־פָּנִים)、すなわち、神と過ごすこと、神を仰ぎ見ること、神を知り、神に愛され、神を愛す

ることです。この「祭司の霊性」が、「ダビデの霊性」「マリアの霊性」「花嫁の霊性」とも深く密接につながっているのです。つまりこれら四つの霊性はみなひとつにつながっていることを、今回、頭に置いていただきたいのです。

●神の民が「祭司としての務め」を回復することによって、はじめて「王としての務め」を完成させることができるのです。その逆ではありません。神のみこころにかなった「祭司の務め」があるところに、神の代理者として「治める」という「王としての務め」が成り立つのです。「王の務め」の特権は単に人(民)を支配するという意味ではありません。神の秘密(奥義)を知り、それによって、神の支配を完成させる務めなのです。「祭司の王国」、「王である祭司」という表現は、神への務めとして密接な関係があるのです。

「あなたがた(=イスラエル)、はわたしにとって**祭司の王国**、聖なる国民となる。」(出エジプト 19:6)
「あなたがたは・・**王である祭司**・・・とされた民です。」(I ペテロ 2:9)
「・・ご自分の父である神のために、私たちを**王国**とし、**祭司**としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくあるように。
アーメン。」(黙示録 1:6)

●「王であり、かつ、祭司としての務め」を果たした最初の人はアダムですが、モーセもその一人です。彼は神の民の指導者である前に祭司でした。「【主】は、人が自分の友と語るように、**顔と顔とを合わせてモーセ**に語られた。」(出エジプト記 33:11)とあります。彼は 40 日間も主の山で過ごした人です。そして神の教え(トーラー)が彼を通して与えられたのです。それゆえモーセには神の権威と神の力が賦与されていました。神の民イスラエルが主を礼拝するために「幕屋」が建造されましたが、そこで「祭司としての務め」を任じられたのはレビ族です。ヤコブの子どもたちの中で「レビ」は三番目の子です。「レビ」という名の意味は、母レアが「今度こそ、夫は私に結びつくだろう。」と言ってつけた名前です。ネーム・セオロジーの視点から見るなら、「レビ」(「レ―ヴィー」לֵוִי)という名前には「**神と結びつく**」「**神と一体となる**」という意味が隠されています。祭司たちはこのレビの系譜にある者たちであり、実はモーセもその系譜の中にいた人です。レビ族はこの務めのために、他の部族とは異なる務めがゆだねられていました。従って、目に見える土地という嗣業は彼らには与えられていません。むしろ彼らの嗣業は、神ご自身なのです。そこには神とのかかわりにおいてきわめて重要な、永遠の祭司としての務めとしての「型」があるのです。

●前置きが長くなりましたが、今の段階では、キリストの花嫁に秘められた啓示をランダムに(示されるままに)取り上げているだけで、まとまった形全体には至っていません。しかし、示されたままを語って行きたいと思います。これまでのことは、「キリストの花嫁の霊性」がダビデやマリア、そして祭司の霊性がつながっていることを知っていただくためです。そのことを念頭に置きつつ、今回の「ブライダル・パラダイム」(2) で取り上げようとしていることは、花嫁がいつの日か花婿と「顔と顔とを合わせる」日を待ち望むという姿勢(ライフスタイル)です。

1.　顔と顔を合わせて見る日まで

●待ちに待った結婚式で、花嫁はベールを顔にかけたままで入場して来ます。花嫁のベールを上げることのできるのは花婿だけです。花嫁がベールを上げられた状態で入場してきたとしたらどうでしょう。私の結婚式の時がそうでした。これは、挙式する私たちも、そして司式者も、そして周囲の者たちも結婚の奥義について全く無知であった証拠

です。今は笑い話になっていますが・・・。パウロはこの結婚の奥義を次のように述べています。

【新改訳 2017】Ⅰコリント書 13 章 12 節
今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには**顔と顔を合わせて見る**ことになります。
今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。

●私たちの救いの究極的な目的は、「**御顔を仰ぎ見る**」(黙示録 22:4)ということです。花嫁の究極の喜びは、花婿といつの日か、「顔と顔を合わせて見る」ということです。では、現在は「顔と顔とを合わせて見る」ことはできないのでしょうか。いいえ。完全ではなくても、「ぼんやり」と見ることはできるのです。「一部分」を知ることができるのです。とすれば、ぼんやりではあっても、花婿の顔を慕い求めようとすることは自然です。主の隠された秘密の一部分ではあってもそれを求めることは自然であり、花嫁に与えられている喜びなのです。その喜びを日々経験することで、花婿を待ち望む思いはより増してくるのです。そうしたあり方、生き方は、ある意味において、主をあかしする力となります。周囲の人々に大きな影響を与えることになるに違いありません。いろいろな催しをして人々を教会に集めたとしても、花嫁の喜びを味わうことがなければ、やがて人は去って行きます。なぜなら、真の希望と信仰と愛が結びつかないからです。生きる力を生み出すことができないからです。

●前回の「ブライダル・パラダイム(1)」で、主を「尋ね求める」、主を「求める」ことこそ、花嫁の霊性なのだということを述べました。今回も、詩篇 27 篇をもう一度味わってみたいと思います。

【新改訳 2017】詩篇 27 篇 4 節、8～9 節
4 一つのことを私は【主】に**願った**。それを私は**求めている**。私のいのちの日の限り【主】の家に住むことを。
【主】の麗しさに**目を注ぎ**その宮で**思いを巡らす**ために。
8 あなたに代わって私の心は言います。「わたしの顔を**慕い求めよ**」と。【主】よあなたの御顔を私は**慕い求めます**。
9 どうか御顔を私に隠さないでください。・・・

※8 節の「あなたに代わって私の心は言います。」とは「主の言葉を借りて言います」という意味(フランシスコ会注解)。
※9 節で、ダビデが「どうか御顔を私に隠さないでください。」と願ったのは、ダビデが主の御顔を仰ぐことが力をもたらすことをよく知っていたからです。)

●これらの節だけでも、「渇望用語」―「希求用語」と言える語彙(動詞)を以下のように多く見出すことができます。
(1) 「願った」・・・・・「シャーアル」(שָׁאַל)
(2) 「求めた、慕い求める」・・「バーカシュ」(בָּקַשׁ)×3 回(4, 8, 8 節)
(3) 「目を注ぐ」・・・・「ハーザー」(חָזָה)
(4) 「思いを巡らす」(新改訳)=「尋ねきわめる」(口語訳)=「朝を迎える」(新共同訳)・・「バーカル」(בָּקַר)

●これらの渇望の目的は、4 節においては「主の家に住み」、そして「主の麗しさに目を注ぐ」ためです。8～9 節では、「御顔を慕い求める」ためです。花嫁の美しさは、花婿をひたすら慕い求めるところにあります。その花婿の御

顔を慕い求めることから離れることは、ぶどうの枝が幹にとどまっていないことを意味します。イェシュアが最後の晩餐の席で、これから地上に残される弟子たちに語られた説教の中で、「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」と言われました。これは花婿を待つ花嫁にも適用できると思います。花婿を慕い求める愛は、その花嫁を最も美しくするのです。

●このことが教会において最も強く表われるのは「聖餐式」においてです。ところが、今日のキリスト教会は聖餐にあずかることのなかに、その喜びが喪失しています。イェシュアの十字架の上で流された血潮は(血の杯)は、ブライダル・パラダイムからすると、御子イェシュアの驚くべき求愛行為なのです。ぶどう液に象徴されるその血潮を飲むという行為は、その求愛行為を受け取ったことを意味します。つまり、そこで婚約が成立し、将来の結婚を約束し合ったことを意味するのです。聖餐式は自分がキリストの花嫁となったことを思い起こすときであり、やがて迎えに来られる花婿の顔を慕い求める生き方を新たにする時なのです。しかし、ブライダル・パラダイムが希薄であるために、聖餐にあずかることがさらなる主の御顔を慕い求めることにつながっていかないのです。それには理由があります。その理由の一つは、ブライダル・パラダイムが明確でないことに起因しています。ブライダル・パラダイムを持つためには、聖書が語っている「その日(主の日)」についての正しい理解、つまり、終末についての知識が不可欠なのです。その知識が欠落しているなら、ブライダル・パラダイムをもって生きることが希薄になります。ブライダル・パラダイムは「御国」のパラダイムそのものなのです。「御国の福音」と「キリストの花嫁」の概念は密接な関係にあります。これからのキリスト教会は、「**御国の福音**」と「**キリストの花嫁**」の概念をより明確にすることが求められているように思います。聖書が「御国」の視点から解釈される時、これまでの解釈とは異なったものが見えてきます。と同時に、教会が「キリストの花嫁」という視点から見直されるとき、今、教会が何をすべきなのか、また、それをいつどのようにすべきなのかが見えてくると信じます。

2.　花嫁が花婿の御顔を慕い求めるための聖別された「時」

●聖書の中で主の御顔を慕い求めた者たち、主と「顔と顔を合わせる」ことのできた人々には、共通したライフスタイルがあることをこれからお話ししたいと思います。先ほどの詩篇 27 篇 4 節を新改訳と新共同訳で読み比べてみます。

【新改訳 2017】
一つのことを私は【主】に願った。それを私は求めている。私のいのちの日の限り【主】の家に住むことを。
【主】の麗しさに目を注ぎその宮で**思いを巡らす**ために。

【新改訳改訂第３版】
私は一つのことを【主】に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、【主】の家に住むことを。
【主】の麗しさを仰ぎ見、その宮で、**思いにふける**、そのために。

【新共同訳】
ひとつのことを主に願い、それだけを求めよう。命のある限り、主の家に宿り／主を仰ぎ望んで喜びを得／
その宮で**朝を迎えること**を。

●太文字&下線の部分に注目してください。「**思いを巡らす**」(新改訳 2017)、「**思いにふける**」(新改訳改訂第３版)

と訳された語彙が、新共同訳では「**朝を迎えること**」(新共同訳)と訳されています。なぜそのような訳になるのでしょうか。その箇所は「バーカル」(בָּקַר)というヘブル語動詞が使われているのですが、動詞「バーカル」には「注意深く調べる」という意味と、「思いにふける」「考え直す」「伺いを立てる」という意味があります。しかしこの動詞の意味からは新共同訳のような意味は出てきません。おそらく、新共同訳は「バーカル」の名詞「ボーケル」(בֹּקֶר)から「朝を迎えること」と訳しているのではないかと思います。ところが、ブライダル・パラダイムから見ると、この訳はとても大切なことを示唆しているのです。というのは、主の御顔を慕い求めた者たち、主と「顔と顔を合わせる」ことのできた人々の共通したライフスタイルは「朝」と関係があるのです。つまり、彼らの多くが「朝」に主と出会っているのです。

●詩篇 63 篇 1 節を見てみましょう。

【新改訳 2017】詩篇 63 篇 1 節
神よ　あなたは私の神。**私はあなたを切に求めます**。
水のない　衰え果てた乾いた地で
私のたましいは　あなたに渇き
私の身も　あなたをあえぎ求めます。

●詩人の渇きは尋常ではありません。主を求めるその渇望は「私はあなたを切に求めます」という表現の中に隠されています。以前、この箇所にある「切に」という訳が「朝早く」と訳すことができることを知りました。ヘブル語の知識のない者にとっては、どうしてそういう訳になるのかが分からないはずです。しかしその「切に」と訳されたヘブル語の「シャーハル」(שָׁחַר)という動詞をヘブル語辞典で調べることにより、それが「熱心に求める、熱心に捜し求める」という意味であることが分かります。しかも、その名詞が「シャハル」(שַׁחַר)で「暁」「夜明け」という意味をもっていることがわかるのです。つまり、旧約の人にとって、主を熱心に捜し求める時は「暁」「夜明け」の時だと分かるのです。詩篇 63 篇の作者の「切に求めます」とは「夜明け」に主を探し求めているのです。なぜ、「夜明け」なのでしょうか。

●これは、この詩人だけでなく、主を求める者たち、主と顔と顔を合わせた者たちが、「朝」、「夜明け」の頃に主の現われを経験しているからです。朝は、主との密会の時なのです。しかも主と出会う最良の時なのです。主がご自身を顕わしてくださる時なのです。**朝は神との交わりにとって一日の中で最も重要な時**なのです。これは私の経験から言っても「アーメン」と言えます。私の「牧師の書斎」には多くのコンテンツが含まれていますが、その最初は「詩篇の瞑想」でした。その内容をブログとして投稿しはじめたのは、2005 年の冬からでした。朝の 2 時、3 時に起きて 2 時間ほど、毎日、詩篇の瞑想を続けたのです。それから 3 年ほどして、詩篇の瞑想にはヘブル語の知識が必要であることを悟って、本格的にヘブル語で神のみことばを味わうようになっていったのです。

●朝はだれにも邪魔されない時であり、主と主のことばに深く沈潜できる最良の時であり、一日の中で最も重要な主の訪れの時なのです。そのことを示す例を見てみましょう。その前に、聖書のいう「朝」とは「第四の夜回り」のことで、今日の午前 3～6 時頃までを言います。

(1) モーセ

【新改訳 2017】出エジプト記 34 章 1～2 節

1 【主】はモーセに言われた。「前のものと同じような二枚の石の板を切り取れ。わたしはその石の板の上に、
あなたが砕いたこの前の石の板にあった、あのことばを書き記す。

2 **朝(בֹּקֶר)までに**準備をし、**朝**シナイ山に登って、その山の頂でわたしの前に立て。

(2) ヤコブ

【新改訳 2017】創世記 32 章 24～26 節

24 ヤコブが一人だけ後に残ると、ある人が**夜明け(שַׁחַר)まで**彼と格闘した。

25 その人はヤコブに勝てないのを見てとって、彼のももの関節を打った。ヤコブのももの関節は、
その人と格闘しているうちに外れた。

26 すると、その人は言った。「わたしを去らせよ。**夜が明ける(שַׁחַר)から**。」ヤコブは言った。
「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらなければ。」

(3) イェシュアの弟子たち

【新改訳 2017】マルコの福音書 6 章 46～49 節、51 節

46 そして彼らに別れを告げると、祈るために山に向かわれた。

47 夕方になったとき、舟は湖の真ん中にあり、イエスだけが陸地におられた。

48 イエスは、弟子たちが向かい風のために漕ぎあぐねているのを見て、**夜明けが近づいたころ**(τέταρτος＝朝 3～6 時頃)
(【新改訳改訂第 3 版】**夜中の三時ごろ**)、湖の上を歩いて彼らのところへ行かれた。そばを通り過ぎるおつもりであった。

49 しかし、イエスが湖の上を歩いておられるのを見た弟子たちは、幽霊だと思い、叫び声をあげた。

51 そして、彼らのいる舟に乗り込まれると、風はやんだ。弟子たちは心の中で非常に驚いた。

●他にも、多くの例を聖書に見出すことができます。ちなみに、イエシュアの祈りの時はいつもまだ暗い時(早朝)でしたし、復活も早朝でした。特に、神(主)がこの地上で私たちに現われて下さる時は往々にして早朝なのです。それゆえキリストの花嫁である私たちは、主が訪れてくださる特別な時間として「朝」(「ボーケル」בֹּקֶר)を聖別しなければなりません。最後に、以下の詩人の声に耳を傾けて終わりましょう。

【新改訳 2017】詩篇 5 篇 3 節

【主】よ　**朝明けに(בֹּקֶר)** 私の声を聞いてください。**朝明けに(בֹּקֶר)** 私はあなたの御前に備えをし 仰ぎ望みます。

●「仰ぎ望みます」と訳された部分を、新改訳改定第三版は「見張りをいたします」と訳しています。私は、この「朝明けの備え(=見張りとしての務め)」を「モーニング・ウォッチ」と呼んでいます。キリストの花嫁のライフスタイルは、この「モーニング・ウォッチ」を力の源泉の時として、日々、聖別することではないでしょうか。

2015.7.12

改定 2018/11/14

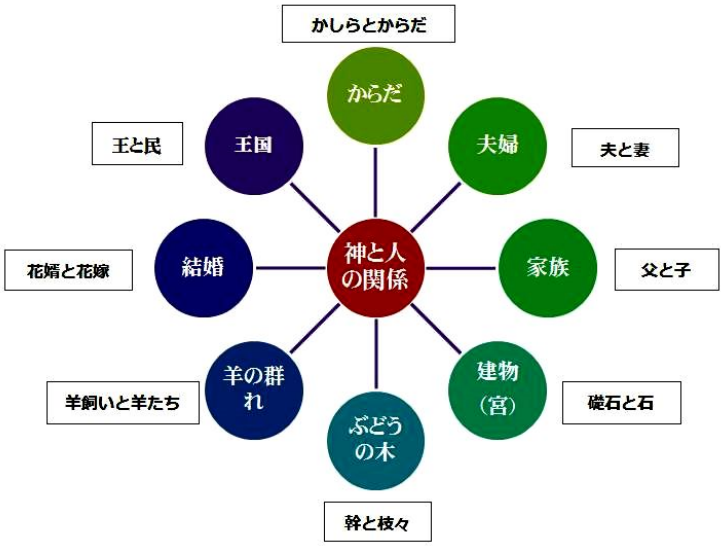
シリーズ「キリストの花嫁」No.4(改定)

ブライダル・パラダイム
(3)

【聖書箇所】　Ⅱコリント書 11 章 2～3 節

ベレーシート

●聖書では神と人とのかかわりをいろいろな比喩を用いて以下のように表しています。私たちが今、取り上げているのは「**花婿と花嫁の関係**」です。婚約は成立していますが、まだ結婚していない状態です。つまり、待ちの状態に置かれています。左の図に共通していることは何でしょうか。「かしらとからだ」「夫と妻」「父と子(子どもたち)」「礎石と石」「幹と枝々」「羊飼いと羊の群れ」「花婿と花嫁」「王と民」のかかわりに共通していることは、「一致する」ことによって成り立つということです。これらは神と神の民イスラエルの関係と、キリストと教会の関係を表わしている比喩です。中でも、「花婿と花嫁」の比喩は、神のご計画を常に意識しながら歩む上で、きわめて夢のある**終末的・未来志向**をもった比喩だと言えます。「宮を建設中」という視点よりも、この「ブライダル・パラダイム」を明確にすることによって、今日のキリスト教会にいのちの回復をもたらすと信じます。



●今回は、シリーズ「キリストの花嫁」の第四回目で、「ブライダル・パラダイム」No.3 です。神と人とのかかわりを「花婿と花嫁」という視点から見る「ブライダル・パラダイム」について取り上げたこれまでのことを、簡単に振り返ってみたいと思います。

●**第一は、花嫁の霊性の特徴**について取り上げました。その霊性の特徴は、何よりも神を知ること、神を愛することを喜びとし、そのことを何よりも大切にすることです。つまり、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして主なる神を愛する」という第一戒に生きる世界であり、それは、主の前にすわって主の語られることばに耳を傾けるというマリアの霊性、あるいは、いのちの日の限り主の家に住むことを願ったダビデの霊性だということでした。しかもそれは、「顔と顔を合わせて」(Face to face/「パーニーム・エル・パーニーム」פָּנִים אֶל־פָּנִים)神と過ごすこ

と、神の秘密(奥義)を知るという祭司の霊性とも関係することを学びました。この祭司の務めによって、地を支配するという王としての務めを完成することができるからです。

●**第二は、花嫁の日々の歩み**について取り上げました。花嫁の究極の喜びは、花婿といつの日か、「顔と顔を合わせて見る」ということです。では、現在は「顔と顔とを合わせて見る」ことはできないのでしょうか。いいえ。完全ではなくても、「ぼんやり」と見ることはできるのです。「一部分」を知ることができるのです。とすれば、ぼんやりではあっても、花婿の顔を慕い求めようとすることは自然です。主の隠された秘密の一部分ではあってもそれを求めることは自然であり、花嫁に与えられている喜びなのです。その喜びを日々経験することで、花婿を待ち望む思いはより増してくるのです。聖書の中で主の御顔を慕い求めた者たち、主と「顔と顔を合わせる」ことのできた人々には、共通したライフスタイルがありました。それは花婿の御顔を慕い求めるために、ある聖別された「時」をもっていたということです。その「時」とは、「暁」「夜明け」の時です。なぜ「夜明け」なのかといえば、一日の中で「朝」は主と出会う最良の時であり、主との密会の時なのだということを心に留めたいと思います。

1. キリストにささげられた花嫁としての教会

●**第三は、花嫁の思いにおける純真さです**。このことを、今回の「ブライダル・パラダイム」(3) として後で取り上げたいと思います。その前に、教会がキリストの花嫁とされたのは神の永遠のご計画によるものであることを学びたいと思います。まずは、テキストを読みましょう。コリント人への手紙第二、11 章 2〜3 節です。

【新改訳 2017】
11:2 私は神の熱心をもって、あなたがたのことを熱心に思っています。
私はあなたがたを**清純な処女として、一人の夫キリストに献げるために婚約させた**のですから。
11:3 蛇が悪巧みによって エバを欺いたように、あなたがたの思いが汚されて、
キリストに対する**真心と純潔**から離れてしまうのではないかと、私は心配しています。

(1) 教会がキリストの花嫁となることは神の永遠のご計画

●ここで使徒パウロはコリントの教会の人々に、「私はキリストの福音を伝えてあなたがたをキリスト教に改宗させようとした」とは述べていません。「あなたがたを清純な処女(単数)として、一人の夫キリストに献げるために婚約させた」と述べています。なぜなら、これが神の永遠のご計画だからです。つまり、あなたがた(教会)がキリストの花嫁であるようにされたのは、この世界の基の置かれる前から神(御父)が御子のために、すでにご計画していたことなのだということです。パウロが考えたことではなく、神がご自身の子である方(イェシュア)に花嫁を与えるというご計画があったのだということなのです。

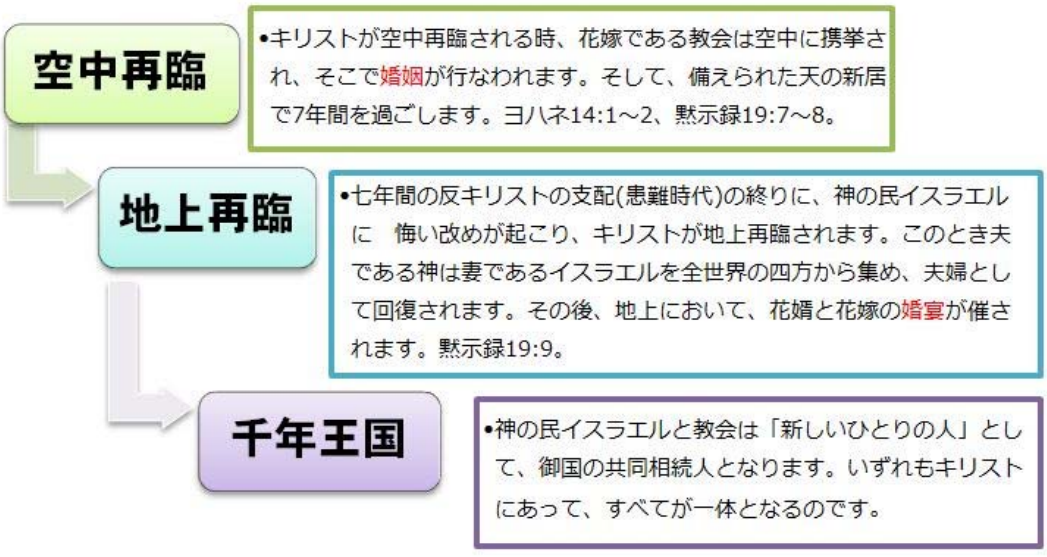
●創世記 2 章に記されているように、神である主はエデンの園に大地のちりで形造った人を置かれました。「エデン」(「エーデン」עֵדֶן)とはとても贅沢な、良い食べ物がたくさんあってそれを思いのまま食べてよい所です。また、いのちの水の源泉であり、その川が四方に流れている所で、それは天にある神の御座から流れてくるいのちの川です。

そこには永遠の喜びと楽しみがあるところ、それが「エデンの園」という意味です。そこに「人」が置かれたのです。「人」は神が造られた被造物(野の獣や空の鳥)のすべてに名をつけるという立場にいました。「名をつける」ということは、それらを支配する力が与えられていたということです。ところが、何かが足りませんでした。何か大切なものが欠如していました。それはその「人」がひとりであったということです。この「人」(「アーダーム」אָדָם)に対して神はこう言われました。「人がひとりでいるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」(新改訳 2017)と。そして彼に深い眠りを与え、その眠っている間に、彼のあばら骨で一人の女を造り上げたのでした。この出来事は実は天のご計画にある写しなのです。男と女(妻)が結び合って一体となるという奥義はそもそも、天にある神のご計画に秘められた出来事だったのです。「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているとパウロは言っているのです(エペソ 5:31～32)。

●パウロはこのような感覚で教会を考えていたのです。少なくとも、私は最近になるまで、教会が「キリストの花嫁」であるというこの概念を明確にはもっていませんでした。もちろん、ことばとしては知っていましたが、念頭に置かれることはなかったのです。これは「御国の福音」を考える上で、また、キリストの再臨と終末に関する教えにおいても重要な概念であり、「終わりの日」に向かっているこれからの時代に必要なパラダイムだということを神の導きの中で確信したのです。「あなたがた」(教会)=「清純な(純潔な)処女(単数)」。「一人の夫キリストに献げるために婚約させた」=「キリストにささげた」という構図です。

(2) イスラエルと教会の関係

●ここで、明確に整理しておきたいことがあります。それは、神の民として選ばれた**イスラエルと教会との関係**です。以下の図で説明したいと思います。



2. キリストの花嫁の品性としての「きよさ」

●教会はキリストの花嫁として婚約したのです。興味深いことに、ユダヤ的文化(神の概念)では、婚約と結婚はほぼ同じ意味で使われています。同じ意味とはどういうことかと言えば、**婚約した場合、その二人の関係は夫婦と同じ倫理が要求される**ということです。かといって正式に結婚(婚礼)をしたわけではありません。結婚するのはキリストが空中再臨される時です。その時がいつかは私たちに知らされていません。その時は御父がゴー・サインを出した時です。それまでは花婿は天において花嫁と共に住むための家づくりに専念しているようです。教会は神のひとり息子の妻となるべく永遠の昔から神のみこころの中に定められていたということです。それゆえ、そうしたご計画に基づいて、パウロは「私はあなたがたを清純な処女として、一人の夫キリストに献げるために婚約させた」(Ⅱコリント11:2)と述べているのです。私たちには、キリストの花嫁として結婚するという意識を明確にもった教会形成が重要です。それは同時に、神のご計画全体(神のマスタープラン)を意識することにもつながるのです。

●さて、Ⅱコリント 11 章 2～3 節には、**キリストの花嫁の品格**―「**清純な処女**」について語られています。まずは、使われている語彙の意味について把握しておきたいと思います。「清純な」(きよい、純潔な、純真な、潔白な、貞潔な)と訳されるギリシア語は「ハグノス」(ἁγνός)で、新約で 8 回使われています。その中のひとつが下記のみことばです。

【新改訳 2017】Ⅰヨハネの手紙　3 章 2～3 節
2 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。
しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。
キリストをありのままに見るからです。
3 **キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。**

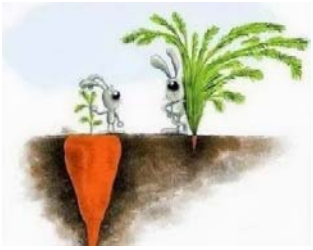
●「この望み」とは、2 節にある「私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になる」という望みです。これは別のことばで言うならば「一心同体」ということです。この「望み」をいだく者はみな花婿なるキリストにふさわしく「自分を清く」しなければなりません。すでに教会はキリストの愛といのちのあかしである血潮によって「きよい」者とされているのです。と同時に、それにふさわしく生きることが求められているのです。なぜなら、その課題は、私たち(花嫁)に与えられている究極の望みから来る必然的な結果なのです。もし「自分を清くする」ことをしないなら、花婿なるキリストと結ばれて一つになることを心から願っていない花嫁であることを、自ら証明しているようなものです。

●「自分を清くする」とはどういうことでしょうか。使徒パウロの表現によれば、「**思いが汚されない**」(Ⅱコリント11:3)ことです。思いが汚されないためには、花婿の語ったことばを自分の思いとすることですが、花婿の語ったことばだけを自分の思いとすることは決して容易ではありません。ですから、使徒パウロは「蛇が悪巧みによって エバを欺いたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔から離れてしまうのではないか」と心配しているのです。

●「花嫁」が「清純な処女」として婚約中の身であることを意識し続ける必要があるのですが、「自分を清くする」とはどういうことなのでしょうか。ジャック・ヘイフォードという牧師の『地震』という本の中に、黙示録 2～3 章にある七つの教会に対する使信から、「**教会のいのちを奪う 4 つの要素**」としてまとめて指摘しているものがあります。それを引用しながら、付け加えて説明したいと思います。

(1) 活動や働きが教会の優先順位の第一になること

●教会のいのちを奪う要素の一つは、活動や働きが教会の優先順位の第一になることです。エペソの教会は、よく働き、仕え、聖書の価値観にも忠実でした。そして長い間、忍耐してきたと主からほめられています。ところが「けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。(新改訳 2017)」と非難されているのです。教会はいつの時代でも、この種の危険性を抱えています。この世においては何らかの目に見える結果を出し、何らかの業績を残すことが常に求められます。成果主義とも言えます。しかし目に見える偉大な業績を成し遂げて成功したとしても、その後には必ず停滞し、成長が止まり、やがて崩壊してしまうケースが多くあるのです。教会も同様です。どのようにすれば建て直すことが可能でしょうか。



●「初めの愛から離れる」ことになる原因のひとつとして、活動や働きが教会の優先順位の第一になっているとすれば、悔い改めて、花婿イェシュアとの親しい交わりに戻らなければなりません。イェシュアとの親しい交わりが失われて、御父の心を見失うとすれば、教会の力の源泉を放棄したことと同様です。イェシュアは「あなたがたはわたしから離れては何も出来ない」と言われました。いのちの源泉はイェシュアにあります。忙しいことは必ずしも良いとは言えません。エペソの教会がそうであったように、活動主義に陥ってはならないのです。忙しく活動し続けることが第一優先事項となってはならないのです。

(2) 不純を認可すること

●バラムとイゼベルの教えに関連する「**サタンの深み**」(黙示録 2:24)は、過剰な刺激を与えることです。現代はまさに「高度刺激社会」です。ゲームはますますリアルになり、その刺激性は増大しています。刺激性の強いゲームをするとコカインや麻薬を投与したときと同じような現象が脳内に起きて快感が得られるのだそうです。快感を伴う刺激が与えられると、それがまた欲しくなり、次第に同程度の刺激では満足できなくなり、さらにより刺激の強いものを求めるようになります。ゲーム依存症、ネット依存症、スマホ依存症、パチンコ依存症、セックス依存症、薬物依存症はみな同じからくりです。そうした依存症の人たちが加速度的に増えつつある社会、これが「高度刺激社会」です。こうした刺激性を求めることを許すことによって、心と思いが汚され、悪霊たちの影響下に自分をさらすことにもなります。それによって、神の目的を全うする人物になる力が制限されます。なぜなら、神のみことばを学ぶことは、一見退屈極まりないものと思われるからです。しかし私たちがキリストの花嫁としてやがて永遠のかかわりを築くためには、じっくりと聖書を読むことは不可欠です。確かに聖書はとても退屈な部分が多々あります。しかし時間をかけてじっくりと読み解いていくとき、それまで見えなかった神の豊かな世界(鉱脈)を見つけることができるのです。地道な取り組みの先に、私たちの霊を喜ばす感動があるということを経験していく花嫁でなければなりません。

今日、みことばの飢饉が襲い、みことばに飢え渇く者たちが少しずつですが、起こって来ているように思います。

(3) 金銭的な成功が神の祝福に等しいとする誤信

●「繁栄神学」では金銭的成功と祝福を同じものと考えています。そのような「繁栄神学」は次第に教会から真のいのちを奪い取っていく考え方です。黙示録 3 章 17 節には次のように記されています。「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、あわれで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」と。物質的な祝福が神の祝福であるというのは全くの嘘だと言うわけではありません。しかし、金銭的成功は神の祝福だと思い込む「惑わし」について、花婿は警告しているのです。花婿よりも「祝福」にウェイトが置かれている信仰は気をつけなければなりません。これはご利益信仰と何ら変わりません。むしろ、常に、無尽蔵な神ご自身の豊かさを求め続ける「心の貧しい花嫁」でなければならないのです。

(4) 恵みと栄光を取り除く宗教的な組織

●イェシュアが非難された教会の第四の問題点は、主の恵みと栄光を取り除く宗教的組織にあります。ニコライ派について二度も言及されています(2:6, 15)。また、「**サタンの会衆**」という言葉もあります(2:9)。これらは、今日にいうマインドコントロールされたカルト集団です。もともとニコライという言葉は、ニカオスとラオスという二つの言葉からなり、講壇に立つ教職についた人々が他の会衆と自分たちを区別するための階級制度を示す言葉でした。指導者だけが重要で、他は指導者に従うだけの存在とみなす考え方です。このようにニコライ派の人々は、人々の思いを支配し、自由にあやつろうとします。真の牧師、および教会の霊的指導者の働きはそのようであってはなりません。イェシュアのいのちが人々を通して流れるように導くことです。花嫁たちの行くべきところに最大限の関心がもてるように助けることです。

ベアハリート

●やがて婚礼の時には、「花嫁は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された」(新改訳2017)とあります(黙示録19:8前半)。「その亜麻布とは、聖徒たち(=花嫁)の正しい行いである」(黙示録19:8後半)と記されていることに注意を払わなければなりません。「**花嫁の正しい行い**」とは(1) ～(4)で説明したことが排斥されることです。
さらに花嫁は、「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔から離れてしまうのではないかと、私は心配しています。」という使徒パウロの心配について、十分に理解する花嫁とならなければなりません。**「純潔」「真実」「貞潔」は、婚約中である花嫁に求められている美しい品性であり、花婿から求められた品格なのです**。しかし花嫁のきよさは、花嫁が「揺り起こしたり、かき立てたりしないでください。愛がそうしたいと思うときまでは。」(新改訳2017、雅歌2:7)とあるように、自発的なものでなければその価値はありません。ただただ花嫁が、花婿の愛に目覚めるように祈りましょう。

2015.7.26
改定 2018/11/14

シリーズ「キリストの花嫁」No.5(改定)

ブライダル・パラダイム
(4)

【聖書箇所】雅歌 1 章、
Ⅱコリント 2 章 14～17 節

ベレーシート

●前回は、「神と人」、あるいは、「キリストと教会」のかかわりを表わす多くの比喩の中で、「**花婿と花嫁**」はきわめて夢のある**終末的・未来志向をもった比喩**だということをお話ししました。この「ブライダル・パラダイム」を明確にすることによって、今日のキリスト教会にいのちの回復をもたらすと信じますが、その「ブライダル・パラダイム」をどのようにして豊かに身につけて行ったらよいのか。その導きの最高のテキストが旧約聖書の「**雅歌**」にあることに、目が開かれています。この「雅歌」は読んですんなりと分かるという書では決してありません。とても難解な書です。一見、「男と女の愛」の書のようにみえますが、そこには神のご計画に隠された「秘密」があります。今日のキリスト教会が「ブライダル・パラダイム」を構築する上で、雅歌の学びは不可欠であり、将来に向かっての大きな示唆を与えてくれると信じます。それで今回は、この雅歌の第 1 章の中から「ブライダル・パラダイム」について学んでみたいと思います。雅歌の 1 章を開いておいてください。

●雅歌の 1 章 1 節には「**ソロモンの雅歌**」とあります。まずは「雅歌」という言葉ですが、それは「歌の中の歌」という意味で、ヘブル語では「歌」を意味する単数形の「シール」(**שִׁיר**)と、冠詞付の複数形「ハッシーリーム」(**הַשִּׁירִים**)を並べることで、「歌の中の歌」「多くの歌の中の最高傑作としての歌」を意味します。単数と複数形を並記する方法は、ヘブル的な強調表現です。

●次に「ソロモンの」という意味ですが、「ソロモンの」とあれば、普通はソロモンが書いたと思われます。しかし必ずしも彼が書いたと理解すべき必然性はありません。原文では「アシェル・リシェローモー」(**אֲשֶׁר לִשְׁלֹמֹה**)とあり、これは「ソロモン的な」という意味で、ソロモンという人物以上に、その名前がもっている語幹、つまり、**שלם**から派生する語彙群のニュアンスが重要なのではないかと考えます。

(1) 動詞「シャーレーム」(**שָׁלֵם**)、無傷である、完成する、報いる、償う、誓いを果たす。
(2) 形容詞「シャーレーム」(**שָׁלֵם**)、自然のままの、完全な、平和な、豊かな、全くひとつの。
(3) 名詞「シェレム」(**שֶׁלֶם**) 、和解のささげもの。
(4) 固有名詞「シャーレーム」(**שָׁלֵם**)、エルサレムの別称。
(5) 固有名詞「シェローモー」(**שְׁלֹמֹה**)、ソロモン。
(6) 名詞「シャーローム」(**שָׁלוֹם**)、神と人とのかかわりの祝福を総括する語彙。平和、繁栄、十全、無事、完全。

●ソロモンが書いたと言っても良いのですが、そのソロモンを越えたところのものが含まれていること

を表わそうとしたのが、「ソロモンの」という意味であろうと考えます。そのように考えると、固有名詞の「ソロモン」は語幹から派生する一つでしかありません。神と人とのかかわりから見る語幹のイメージ、あるいは神のご計画から見る語幹のイメージは、「傷のないもの」であり、しかも本来あった「ありのまま」のかかわりであり、全く一つとされた祝福のかかわりであり、それがエルサレムにおいて、王なる方によって完成・成就されるものと言えます。まさに雅歌は、そのような愛の世界を歌った**預言的な歌**と言えるのではないかと思います。

●もうひとつ、この「雅歌」を理解する上で知っておいてほしいことは、この書は「顔と顔を合わせる」(face to face)世界だということです。これは愛の究極的表現です。創世記 1 章 1 節に「初めに、神が天と地を創造した。」とありますが、聖書における「天」と「地」は別々のものではなくて、向かい合っている関係にあります。地にあるすべてのものは、天にあるものの写しなのです。したがって、愛というかかわりの本源も天にあります。新約聖書のヨハネの福音書の冒頭は、「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった」とあります。「～と共にあった」の「共に」に使われているギリシア語は「プロス」(πρός)で、それは「向かい合っているかかわりとしての共に」を意味します。マイクが 2 本並列しているかたちでの「共に」ではありません。天では御父と御子が向かい合っているのであり、その写しの地的現実が男と女(夫と妻)のかかわりです。結婚の奥義は天にある「プロス」の神秘とつながっているのです。救いの究極は、黙示録 22 章 4 節にある「御顔を仰ぎ見る」ことです。つまり、このかかわりの神秘を「雅歌」が啓示しているように思います。「雅歌」の世界は、単なる男女を超越した、天と地、神と人、夫妻、花婿と花嫁が結び合って一つ(「エハーッド」**אֶחָד**)になる喜びの世界を描いています。いわば、神のご計画における「奥義の中の奥義」が雅歌の中に隠されているように思われます。

1. 二つの呼びかけ

●雅歌 1 章には二つの方向をもった呼称があります。一つは花婿が花嫁に向けて語る呼称と、もう一つは花嫁が花婿に向けて語る呼称です。その呼称が異なることで、誰が語っているかが明瞭になります。

(1) 9～11 節は花嫁に対する初めての花婿の言葉ですが、花婿が花嫁を呼ぶときに、決まって「**わが愛する者(よ)**」と呼びかけます。原語は「ラヤーティー」(**רַעְיָתִי**)で、雅歌では **9 回**(1:9, 15/2:2, 10, 13/4:1, 7/5:2/6:4)使われています。

(2) 花嫁が花婿に向かって呼びかけるときは、「**私の愛する方**」です。原語は「ドーディー」(**דּוֹדִי**)で **20 回**(1:13, 14. 16/2:3, 9, 10, 16, 17/4:16/5:4, 5, 8, 10, 16/6:2, 3/7:10, 11, 13/8:14)使われています。
ところが、実は花嫁が花婿に向かって呼びかけるもう一つの呼称があります。この呼称は 1 章 7 節に初めて登場します。それは「**私の愛している人**」(新改訳改定第三版)、「**私のたましいの恋い慕う方**」(新改訳 2017)」で、原語は「シェアーハヴァー・ナフシー」(**שֶׁאָהֲבָה נַפְשִׁי**)で **5 回**(1:7/3:1, 2, 3, 4)使われています。直訳すると「私の魂が愛しているところの人」となります。新共同訳は「わたしの恋い慕う人」と訳しています。「魂」を意味する「ネフェシュ」(**נֶפֶשׁ**)は、本来「喉」を意味する語で、

そこからあらゆる欲望の座として用いられ、渇きや所有を伴う熱愛を意味します。したがって、「私の魂の熱愛する人」とも訳せます。以下は、この呼称が使われている箇所の引用です。

【新改約 2017】

(1) 1 章 7 節

私のたましいの恋い慕う方。どうか私に教えてください。どこで羊を飼っておられるのですか。昼の間は、どこでそれを休ませるのですか。なぜ、私はあなたの仲間の羊の群れの傍らで、顔覆いをつけた女のようにしていなければならないのでしょう。

(2) 3 章 1 節

私は夜、床についていても、**私のたましいの恋い慕う方**を捜していました。私が捜しても、あの方は見つかりませんでした。

(3) 3 章 2 節

「さあ、起きて町を行き巡り、通りや広場で、**私のたましいの恋い慕う方**を捜して来よう。」私が捜しても、あの方は見つかりませんでした。

(4) 3 章 3 節

町を行き巡る夜回りたちが私を見つけました。「**私のたましいの恋い慕う方**を、お見かけになりませんでしたか。」

(5) 3 章 4 節

私は彼らのところを通り過ぎると間もなく、**私のたましいの恋い慕う方**を見つけました。私はこの方をしっかり捕まえて放さず、ついには私の母の家に、私を身ごもった人の奥の間に、お連れしました。

●よく観察していただくと分かるように、ここには、花婿を探し続けて、最後には見つけるという花嫁の姿があります。花婿をどこまでも探そうとするのは花嫁の大切な霊性です。「探し求めて」、そして「見つける」というのは、雅歌における重要なテーマだということが分かります。使徒パウロもこの花嫁の霊性を持った人です。ですから彼は、多くの奥義を啓示されたのです。そのパウロが次のように述べています。

【新改訳 2017】Ⅰコリント書 13 章 12 節

今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。

●以上のように、雅歌には花婿の声以上に花嫁の声が多く語られています。9 対 25 で、圧倒的に花嫁が花婿を求め、捜し、見つけようとしているのです。まさに雅歌は花嫁の霊性を彷彿とさせてくれる書なのです。そこで、1 章の最初の部分から花嫁が語っていることばに注目したいと思います。2～4 節は序文のような部分ですが、すでにそこにおいて、花婿を慕い求める花嫁の霊性は明確に記されています。

2. あの方が私に口づけしてくださったらよいのに

【新改訳 2017】雅歌 1 章 2 節

あの方が私に口づけしてくださったらよいのに。あなたの愛は、ぶどう酒にまさって麗しく、
【新共同訳】
どうかあの方が、その口のくちづけをもって／わたしにくちづけしてくださるように。
【フランシスコ会訳】
あの方が、わたしに熱い口づけをしてくださいますように。

●「口づけ」と訳された「ネシーカー」(נְשִׁיקָה)は「花婿のことば」を意味します。しかもそれが複数形で記されているのは、花嫁がたえず花婿のことばを望んでいるからです。ですから、複数形の「ネシーコート」(נְשִׁיקוֹת)は望み(願い)の熱烈さを表しているのです。フランシスコ会訳は「熱い口づけ」と訳し、NEB 訳では「口づけでわたしを窒息させるほどに」と訳しています。このように、「口づけ」が複数形になっているのは、熱烈な愛を表現するためのヘブル的表現法です。

●ところで、ここでの「口づけ」とは神のみおしえ(トーラー)、あるいは花婿をとおして語られる神のことばが啓示されることの比喩的表現です。ここが「自然的解釈」と異なる点です。そもそも「口づけ」するということは、花婿と花嫁が顔と顔を合わせる行為です。花嫁がその熱い口づけを求めているのは、花婿の心と思いを知ろうとする熱意のためです。花嫁の唯一の希求は花婿を知ることなのです。今、花嫁はぼんやりとしか見えていません。一部分しか知っていないのです(Ⅰコリント 13:12)。しかし、やがて花婿が来られて顔と顔を合わせる時には、すべてをはっきりと完全に見る(知る)ことができるのです。花婿に対する愛は神のことばの開示であり、それを切望することこそ花嫁の霊性です。その視点から、2 節前半を再度読んでみると、願望と確信の狭間で、神のみことばの開示を待ち望んでいる花嫁の姿が浮かび上がってきます。

3. ぶどう酒に勝る花婿の愛

●2 節は「あの方が私に口づけしてくださったらよいのに。」といわば花嫁の独り言のように語っているのに対して、2 節の後半の人称が「あの方」(原文は「彼」)から「あなた(の愛は)」とあるように、3 人称から 2 人称に急に変わっています。この変化は、「私」と「あなた」という関係の意識的転換を意味しているのかも知れません。

●花婿の愛は、この世の喜びや楽しみを意味する「ぶどう酒」よりもはるかに勝るものだと花嫁は告白しています。しかし同時に、聖書における「ぶどう酒」は人の心を喜ばす神のトーラー(みおしえ)を表わす比喩でもあるのです。神のトーラー(神のことば)がなぜ「ぶどう酒」にたとえられるのかと言えば、それを受ける人の心を喜びで酔わせ、生命力を与えて、まなざしも行動も新しい輝きを帯びさせるからです。ぶどう酒は「いのちの象徴」なのです。本来の神のトーラーは命令や禁止事項を並べ立てたものではなく、人に対する神の啓示全体を意味するものであり、そこには神の愛があふれているのです。人となって来られたイェシュアは、神のトーラーをそのように解釈しました(マルコ 12:28～33)。御国においてはメシアなる方がこの神のトーラーによって治めるのです。命令ではなく、神のトーラーが人の心の内に刻まれ、また人も朽ちない身体に変えられてそのことが実践できるようになるという新しい契約

の実現によってそうなるのです。それゆえに、御国においては「喜び」が基調となるのですが、「ぶどう酒」にたとえられる神のトーラーの源泉は愛なのです。その意味で、「ぶどう酒」にまさる「あなたの愛」という表現は理にかなっているのです。

●雅歌における「ぶどう酒」(「ヤイン」יַיִן)は七回使われています(1:2, 4/2:4/4:10/5:1/7:10/8:2)が、その中から二箇所ほど抜粋してみましょう。

【新改訳 2017】
4:10 私の妹、花嫁よ。あなたの愛は、ぶどう酒にまさって麗しく、あなたの香油の香りは、すべての香料にまさっている。

7:9(10) 「あなたの口は最良のぶどう酒のようであれ。」
そのぶどう酒は、私の愛する方に滑らかに流れ、眠っている者たちの唇に流れる。

●今日、「ぶどう酒」である神のトーラー(みことば)が甘くないのは、私たちの中に神を求めようとしない罪があるからです。しかし、みことばに対する渇きは神の導きの中で引き起こされるのだと思います。今日のキリスト教会は、「みことばの飢饉」を招いています。その飢饉とは、みことばを聞いても満たされないという霊的現実です。その飢饉は、神のご計画の全体、神のヴィジョンとその完成、イェシュアが語った「御国の福音」が見えないことに現われています。

4. あなたの名は注がれる香油のようにかぐわしい

【新改訳 2017】雅歌 1 章 3 節前半
あなたの香油は香り芳しく、あなたの名は、注がれた香油のよう。
【新共同訳】
あなたの香油、流れるその香油のように／あなたの名はかぐわしい。

●雅歌の特徴の一つとして、五感によって味わう語彙が多いということです。
(1) 触覚・・「口づけ」
(2) 嗅覚・・「香油のかおり」(さまざまな香料)
(3) 味覚・・「甘いぶどう酒」
(4) 視覚・・「あなたの目は鳩のよう」
(5) 聴覚・・「愛する方の声」

●五感のすべてを通して味わう崇高な愛のかかわり、これが雅歌の世界です。雅歌における花婿と花嫁のかかわりは、言葉だけでなく、双方のかぐわしい香りによってもその存在を確かめ合っているのです。「香油」(「シェメン」שֶׁמֶן)は愛を表す比喩的語彙です。「口づけ」も複数形でしたが、ここでも「香油」も複数形が用いられています。つまり、花婿はきわめてかぐわしい香油を注がれた存在なのです。「香り」によってある特定の存在を指し示しているのです。それゆえ雅歌にはさまざまな香料が登

場します。ヘブル的世界では、名がその人を表わすように、その人の香りがその人を表わすようです。花嫁の香りは「ナルド(נֵרְדְּ)」の香りのようです。雅歌 1 章 12 節では「王が長椅子に座っておられる間、私のナルドは香りを放っていました。」とあります。数ある香料の中で花嫁の香りはナルドの香りです。花婿の花嫁をたたえることばがすごいのです。「あなたの香油の香りは、すべての香料にもまさっている。」(4:10)と。これは預言的なことばです。「ナルド」と語彙は、雅歌の 3 回しかありません(1:12, 4:13, 14)

●ナルドの純粋な高価な香油をイエシュアの頭に惜しみなく注いだ一人の女性がおりました。その名はイエシュアの足もとで語られることばにいつも耳を傾けていたマリアです(マルコ 14:3/ヨハネ 12:3)。イエシュアが十字架の道を歩む壮絶な苦しみによって死に至ることを悟ったただひとりの女性、それがマリアでした。そのマリアがイエシュアの頭に(足に)注いだナルドの香りは、苦しみの道を歩むイエシュアの身体から決して消えることはなかったはずです。そのナルドの香りは、イエシュアに対するマリアの最上の愛をあかしする香りだったのです。イエシュアもこのマリアがした行為をいつの時代でも記念するようにと語られました。「マリアの霊性」はまさに「花嫁の霊性」なのです。

5. 花婿キリストを知る知識の香り

●「あなたの香油の香りは、すべての香料にもまさっている。」(雅歌 4:10)とは、花嫁に対する花婿の絶賛です。そんな香りが教会にあることを、使徒パウロは以下のように語っています。

【新改訳 2017】Ⅱコリント書 2 章 14～17 節
14 しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちをキリストによる凱旋の行列に加え、私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいます。
15 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神に献げられた芳しいキリストの香りなのです。
16 滅びる人々にとっては、死から出て死に至らせる香りであり、救われる人々にとっては、いのちから出ていのちに至らせる香りです。このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか。
17 私たちは、多くの人たちのように、神のことばに混ぜ物をして売ったりせず、誠実な者として、また神から遣わされた者として、神の御前でキリストにあって語るのです。

●「神はいつでも、私たちをキリストによる凱旋の行列に加え、私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいます。」ということを信じなければなりません。しかし、私たちがキリストの香りを放ったからと言って、誰にでも喜ばれるとは限りません。その香りをもろに嫌って拒絶する人もいるでしょうし、全く問題にしない人もいるのです。しかしそうであっても、教会(私たち)はキリストの香りを放つことをやめてはいけないのです。その香りを受け入れる人が起こされるかもしれないのです。

●ただし、決して人に媚びてはいけないのです。重要なことは 2 章 17 節にあります。そこには、二つのことが語られています。

(1)　私たちは、多くの人橘のように、神のことばに混ぜ物をして売ったりしない。
(2)　誠実な者として、また神から遣わされた者として、神の御前でキリストにあって語る。

●なぜなら花嫁なる教会の放つ香りが、常に「いのちから出ていのちに至らせる香り」となるためです。そのためには、いつも、真心から、真摯に、みことばを通して神のご計画である「御国の福音」を余すところなく語らなければならないのです。聞く人にとって、わかりやすい話ではありません。人々が経験したあかしの方が共感しやすくわかりやすい話として好まれるでしょう。しかし、それだけでは、イエシュアの語った「御国の福音」を知ることはできないのです。

ベアハリート

●「口づけ」を意味するヘブル語の名詞「ネーシェク」נֶשֶׁק)には、「武器」という意味があります。そしてその動詞(「ナーシャク」נָשַׁק)の分詞は「神の武器を身に着けている者」を意味します。「みことばの飢饉」と言われるこの時代において、花嫁である教会はますます''花婿に「ふさわしい助け手」としてみことばの奥義を解き明かすことが求められているのです。「難しい」という人々の拒絶反応を恐れることなく、常に神の御前で語るという姿勢を崩さずに、御国の秘密を告げ知らせなければならないのです。これがキリストの花嫁に課せられた使命なのではないでしょうか。

●結論を言うならば、花嫁のかおりとは、神のことばに混ぜ物をして売るようなことはせず、真心から、また神によって、神の御前でキリストにあって語ることなのです。そのためには、キリストの花嫁である教会が花婿なるキリストの口づけをもっともっと熱心に渇望するようにならなければなりません。

2015.8.9
改定 2018/11/22

シリーズ「キリストの花嫁」No.6(改定)

ブライダル・パラダイム(5)

【聖書箇所】　雅歌 2 章 1～7 節

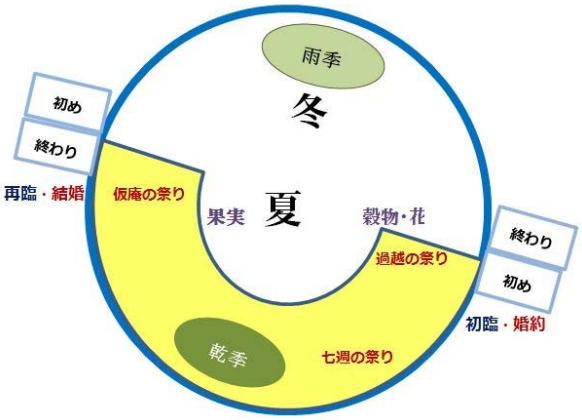
ベレーシート

●今回は花婿と花嫁とのかかわりの背景にあるヘブル的時間感覚について取り上げてみたいと思います。雅歌を学ぶうちに、そこにある季節感は私たち日本人とは異なることに気づきました。日本人には春夏秋冬という四つの季節感覚がありますが、聖書の世界(ヘブル的な世界)には二つの季節感覚しかないということです。それは神のご計画を考える上できわめて重要な事柄なのです。

●右の図を見ると分かるように、一年は二つの季節、つまり冬と夏の季節しかありません。私たちの言う「秋」は夏の季節の「終わり」であり、冬の季節の「始まり」なのです。また、「春」は冬の季節の「終わり」であり、夏の季節の「始まり」でもあるのです。そうした二季感覚がヘブル的季節感覚なのであり、「秋」とか「春」というヘブル語の語彙はないのです。聖書はそうした時の概念をさまざまな自然の風物によって描き出していると言っても過言ではありません。聖書における季節は「四季」ではなく、「二季」なのです。

【新改訳 2017】雅歌 2 章 10～13 節

10 私の愛する方は、私に語りかけて言われます。「わが愛する者、
　私の美しいひとよ。さあ立って、出ておいで。
11 ご覧、冬は去り、雨も過ぎて行ったから。
12 地には花が咲き乱れ、刈り入れの季節がやって来て、山鳩の声
　が、私たちの国中に聞こえる。
13 いちじくの木は実をならせ、ぶどうの木は花をつけて香りを放
　つ。わが愛する者、私の美しいひとよ。さあ立って、出ておいで。
　わが愛する者、美しいひとよ。さあ、立って、出ておいで。」



●花婿と花嫁の出会いは、冬が過ぎ去った夏の季節においてです。すなわち、それは花が咲き乱れる歌の季節であり、「いちじくの木は実をならせ、ぶどうの木は、花をつけてかおりを放つ」季節なのです。やがていちじくの実やぶどうの実が収穫されるその時には、花婿と花嫁が結ばれる時なのです。

●夏の季節の中には、主の三大例祭があります。「過越の祭り」「七週の祭り」「仮庵の祭り」です。なかでも、「仮庵の祭り」は重要であり、単に、「主の祭り」と言えば、「仮庵の祭り」のことを意味するほどです。なぜなら、その祭りは神のご計画(マスタープラン)においてとても重要だからです。過越の祭りに婚約した花婿と花嫁は、仮庵の祭りの始まる「ラッパの祭り」の時期に花婿が迎えに来ることで結婚するのですが、その時がいつかは知らされていません。しかし、イエシュアはこう言われました。

【新改訳 2017】マタイの福音書 24 章 32～33 節

32 いちじくの木から教訓を学びなさい。枝が柔らかになって葉が出て来ると、夏が近いことが分かります。

33 同じように、これらのことをすべて見たら、あなたがたは人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい。

●上記のイェシュアのことばは、文字通りの意味ではなく、二つの季節の中に隠されている神のご計画(マスタープラン)についての真理を悟るようにと促しているように思います。

●ところで冬の季節は「雨季」です。反対に夏の季節は「乾季」です。冬の季節の終わりには多くの穀物が収穫されます。そして多くの花が咲き乱れます。一方、夏の季節の終わりには多くの果実(ざくろ、いちじく、ぶどう、オリーブなど)が収穫されます。この「冬から夏へ」という時間感覚は、創世記 1 章 5 節にある「こうして夕があり、朝があった」というリズムから来ています。一日は夕から朝だけでなく、朝から夕までの流れがありますが、ヘブル人たちは一日のリズムを「夕があり、朝があった」と表現するのです。そのリズムは、詩篇においては「嘆きから賛美へ」という感覚として現わされるのです。それは「夕暮れには涙が宿っても朝明けには喜びの叫びがある。」(詩篇 30:5)とあるように、神への信仰から来る希望に満ちた感覚であり、神の恩寵、ないし救済のリズムと言えるのです。あるいは、終わりの徹底的な破滅の向こうに、新しい喜びの世界が始まることを示唆しています。このヘブル的時間感覚を意識しながら聖書を読むことで、今まで気づかなかった多くの事が見えるようになると信じます。それは花婿と花嫁の愛の歌である「雅歌」においても然りです。

1. 「花」という語彙を中心とした愛のかかわり

●雅歌は花婿と花嫁の愛のかかわりが描かれていますが、それが呼応している描写に注目する必要があります。雅歌の解釈については、これまで多くの解釈が試みられてきました。大きく分けると「比喩的(寓意的)解釈」と男の女の愛をありのままに描いたものとして解釈しようとする「自然的解釈」の二つです。しかし、私はこの雅歌を先の二つの解釈を踏まえながら、神のご計画の目的という聖書の鳥瞰的な視点とヘブル的視点から、そして「御国の福音」の視点からの解釈を試みたいと考えます。なぜなら、花婿と花嫁の比喩はキリストと教会の愛のかかわりの奥義であると使徒パウロは理解したからです。旧約の中にありながら、やがて啓示される花婿なるキリストと花嫁なる教会の奥義がこの「雅歌」の中にあると信じます。その向き合い方を、まずは雅歌 2 章 1～2 節から見てみたいと思います。

【新改訳 2017】雅歌 2 章 1～2 節

1 私はシャロンのばら、谷間のゆり。

2 わが愛する者が娘たちの間にいるのは、茨の中のゆりの花のようだ。

(1) 花嫁のことば

●「私はシャロンのばら、谷間のゆり。」これはヘブル語特有のパラレリズムです。つまり、ここで花嫁は自分のことを春先(正しくは夏の初め)に咲く花にたとえているのです。「シャロン」はイスラエルの西海岸

の平野を意味します。「ばら」(新改訳 2017)と訳された原語は「ハヴァッツェレット」(חֲבַצֶּלֶת)で、新共同訳も「ばら」、岩波訳は「百合」、フランシスコ会訳・バルバロ訳は「水仙(すいせん)」とそれぞれ訳しています。

●後半の「ゆり」(新改訳・新共同訳・フランシスコ会訳・バルバロ訳)と訳された原語は、「シューシャン」(שׁוֹשַׁן)です。おそらくこれは「アネモネ」という赤い花のことを示唆しています。「谷」と訳された「ハアマーキーム」(הָעֲמָקִים)は谷間であっても比較的広々とした平野を意味します。「ハヴァッツェレット」(חֲבַצֶּלֶת)にしても、「シューシャン」(שׁוֹשַׁן)にしても、春先に咲く花として、花嫁の愛の初々しさを表している表現と言えます。たとえその花がどこに咲いていようとも、花婿はそれを決して見逃さないということが重要なのです。2 節はそのことを示しています。ちなみに、イエシュアが「野のゆり」のことを話したことがありますが(マタイ 6:8)、その「野のゆり」もヘブル語では「シューシャン」(שׁוֹשַׁן)の複数形です。「ゆり」は神に選ばれた者の象徴です。

(2) 花婿のことば

【新改訳 2017】雅歌 2 章 2 節
わが愛する者が娘たちの間にいるのは、茨の中のゆりの花のようだ。

●ここでも、「茨の中のゆりの花」と「わが愛する者が娘たちの中にいる」は同義(パラレリズム)なのです。「わが愛する者」(これは花婿が花嫁を呼ぶ呼び方)が、たとえ多くの娘たちの中に紛れていたとしても、花婿はその存在をいち早く見つけることができるだけでなく、「わが愛する者」がひときわ目立つ存在として目に映っていることがここでは重要なのです。そのことを「いばらの中のゆりの花のようだ」と描写しているのです。1 節と 2 節をつないでいるのは「**花**」です。「花」の季節に花婿と花嫁が出会ったことが描かれているのです。

2. 「りんごの木」という語彙を中心とした愛のかかわり

●2 節では、花婿が花嫁の存在をいばらの中にある「ゆりの花」として注目しましたが、3 節では反対に、花嫁は林の中にある木々の中にある「りんごの木」として花婿の存在を見ています。

【新改訳 2017】雅歌 2 章 3 節
私の愛する方が若者たちの間におられるのは、
林の木々の中のりんごの木のようです。
その木陰に私は心地よく座り、
その実は私の口に甘いのです。

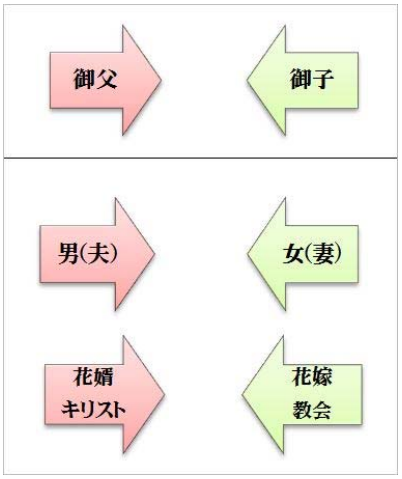
●3 節の前半も「私の愛する方」(花婿に対する呼び名)の存在を、若者たちの間にいることを、林の木々の中の「りんごの木」のようだと描写しています。「りんごの木」と花嫁の呼応を、ここではその木を慕って

その「木陰に座る」という表現と、「その実が私の口に甘い」という表現で描写しています。

●3 節の後半は、「りんごの木」に象徴される花婿の陰(=「ツェール」צֵל)に座わる(住む)ことを花嫁は切に望んでいます。それは花婿の保護のもとに身を寄せることを意味しています。なぜなら、「その実は私の口に甘い」からです。「甘い」という感覚はとても光栄に満ちた祝福で、しかも自分を「カづけて」くれることの象徴的表現です。詩篇 91 篇 1 節に、「いと高き方の隠れ場に住む者　その人は全能者の陰に宿る。」とあります。そこにある「隠れ場」(「セーテル」סֵתֶר)と「陰」(「ツェール」צֵל)は同義です。そこには親密な信頼と安心の保障があります。

●キリストとその教会がそのようなかかわりを深めることが重要です。
最近私は、YouTube で、「360 年間解けなかった数学の難問を解いた超天才」の動画を見ました。彼は 10 歳の時にその難問を知り、それを解くことが自分の生涯の仕事だと直感しました。やがてそれに挑戦しようとしますが、勤めていた大学の教授からストップがかかります。なぜなら危険な賭けだからです。しかし、あることから再度チャレンジします。彼はその難問を解くために一人屋根裏部屋にこもりました。そして七年経って突然、答えが与えられたと言います。他にも、数学の難問を解くために結婚もせず、世俗から離れて一つのことに集中したことで、誰も解くことができなかった答えを見つけ出した天才たちがいることを知りました。そんな動画を見ながら、今日、神の隠された秘密を解くことのできる者はだれなのか。それはキリストの花嫁でしかないと悟りました。

●花婿の象徴であるりんごの木陰に座ることを切に望む花嫁、その花嫁こそ、その木の実が口に甘いことを知るのです。神が「人がひとりでいるのは良くない」と言って、神は人に「ふさわしい助け手」を与えました。人の「ふさわしい助け手」とは、「彼と向き合ったふさわしい助け手」(「エーゼル・ケネグドー」)の存在です。「彼と向き合った者」とは名詞「ネゲド」נֶגֶד)ですが、その動詞「ナーガド」(נָגַד)は「解き明かす、示す、告げる」ことを意味します。そのような特権にあずかっているのは、まさに「キリストの花嫁」の他には存在しません。そのことをキリストの花嫁は自ら悟り、「御国の福音」の秘密を解き明かすためにますます花婿を尋ね求める必要があるのです。それが旧約聖書の意味する「愛」(「アハヴァー」אַהֲבָה)が意味することなのです。



3. 神のご計画における「すでに」と「いまだ」の啓示

●雅歌 2 章 4～6 節には二つの時制があります。その一つは完了形で、もう一つは未完了形です。

【新改訳 2017】雅歌 2 章 4～6 節
4 あの方は私を酒宴の席に伴ってくださいました。私の上に翻る、あの方の旗じるしは愛でした。

5 干しぶどうの菓子で私をカづけ、りんごで元気づけてください。私は愛に病んでいるからです。
6 ああ、あの方の左の腕が私の頭の下にあって、右の腕が私を抱いてくださるとよいのに。

●原文では、4～6 節にある動詞は四つですが、うち二つは 5 節にある「カづけよ」「元気づけよ」は命令形ですから、どちらかと言えば、すでに実現された事柄ではなく、いまだ実現されていない状況における願いを表しています。したがって、4～6 節にある動詞のもう二つは、すなわち、「伴ってくださった」と「抱いてくださる」です。

●4 節には「あの方は私を酒宴(原文は「ぶどう酒の家」)に伴ってくださった」とあり、使役形の完了形が使われています。「伴われる」の原語は「ボー」(**בּוֹא**)」で、「来る」とも「行く」とも訳されます。ヘブル語は今その事が実現していなくても、必ずそのことが実現する場合には完了形で表わされます。そしてそれが可能であるのは「あの方の旗が愛」だからです。「酒宴の席」(=ぶどう酒の家「ベート・ハッヤーイン」**בֵּית הַיָּיִן**)とは「婚礼の宴会」を意味します。花婿が来られて「酒宴の席」に伴われたとは、やがて実現する婚礼です。しかし 7 節で、「ああ、あの方の左の腕が私の頭の下にあって、右の腕が私を抱いてくださるとよいのに。」とは、いまだそのことが実現していないことを物語っています。すなわち、未完了形なのです。すでに確実な約束と、その実現を待望する中に揺れ動く花嫁の置かれた心情、それを「愛に病んでいる」と表現しているのです。

●今日のキリストの花嫁は「すでに」と「いまだ」というこの緊張に耐えなければなりません。そのためには「支えられ、カづけられる」(「サーマフ」**סָמַךְ**)こと、また「元気づけられる」(「ラーファド」**רָפַד**)ことが必要です。なぜなら、花婿は必ず来られて、その右の手でしっかりと花嫁を抱く時が来るからです。それまでの緊張感の中に生きることこそが花嫁の霊性であり、花嫁の輝きです。そしてそれは時として花婿を慕う「病」のようにすら見えるのです。今日の教会がそのような花嫁であるかどうかを吟味されなければなりません。しかしそれは決して煽り立ててはならないことを花婿は望んでおられます。それが 7 節のことばです。

4. 愛の目ざめのとき一愛の神秘

【新改訳 2017】雅歌 2 章 7 節
エルサレムの娘たち。私は、かもしかや野の雌鹿にかけてお願いします。
揺り起こしたり、かき立てたりしないでください。愛がそうしたいと思うときまでは。

【新改訳改訂第 3 版】雅歌 2 章 7 節
エルサレムの娘たち。私は、かもしかや野の雌鹿をさして、あなたがたに誓っていただきます。
揺り起こしたり、かき立てたりしないでください。愛が目ざめたいと思うときまでは。

●7 節は花婿が語るリフレイン(反復句)です。というのは、2 章 7 節の他に、3 章 5 節、および 8 章 4 節にも繰り返されているフレーズだからです。繰り返されているということは、そのことが重要だからです。愛は、自分から、あるいは人から強制されて作り出せるものでありません。「この人を絶対に愛して行きま

す。永遠に愛して行きます」と口で言ったとしても、そうすることはできないのです。愛には「目覚め」(上からの霊的な促しによる主体性・自発性)が必要なのです。それゆえに尊いと言えます。そしてそれが「目覚める」とき、「そうしたいと思うとき」には「強さ」を表してきます。8 章 6 節に「愛は死のように強く」とあるとおりです。そして、その愛(=目ざめの愛)は、「大水も消すことができない」のです。このようにキリストの花嫁は主体的・自覚的に花婿なるキリストへの愛に目覚め、恋い慕うことが求められているのです。それは、「顔と顔を合わせて」、毎日のように、花婿を慕い求め続けることを意味するのです。

●使徒パウロは、「『だれが主の心を知り、主に助言するというのですか。』」しかし、私たちはキリストの心を持っています。」と言いました(Ⅰコリント 2:16)。「キリストの心を持っている」というのは、キリストの花嫁が至るべき境地です。花婿の心を知らずして、どうしてその花嫁になれるでしょうか。同じく、ローマ人への手紙 11 章 34 節でもパウロは、「だれが主の心を知っているのですか。だれが主の助言者になったのですか。」と語っています。キリストの花嫁とは、「主のみこころを知る」だけでなく、「主の助言者」(新改訳改定第三版『ご計画にあずかった者』)になったとパウロは理解しています。これはどういう意味でしょうか。

●新改訳 2017 は「主の助言者になった」と訳していますが、原語は「スムブーロス」(σύμβουλος)で、顧問とか、相談役(カウンセラー)といった意味です。つまり、ここでパウロは、だれが「神の顧問」となったのかと言っているのです。神の顧問とは、御国についての相談に応じることのできる人なのです。これこそ、「花婿にふさわしい助け手」ではないでしょうか。イェシュアが語った「御国の福音」がいかなるものであるか、神のご計画はいかなるものであるか、その相談役として、その道の顧問となるために、さらなる渇望を持った花嫁となりたいと思います。だれが主の心を知り、主に助言するというのですか、だれが神のご計画を知る相談役となったのですかという「問いかけ」の言葉の背後には、それはまさに「キリストの花嫁」以外にはいないではないかという真意が込められているのではないでしょうか。そのような、高められた「ブライダル・パラダイム」をもった私たちとなるように、祈りたいと思います。

2015.8.16
改定 2018/11/22

シリーズ「キリストの花嫁」No.7(改定)

ブライダル・パラダイム
(6)

【聖書箇所】雅歌 3 章 1～4 節、 5 章 2～6 節

―成熟するための花嫁に対する訓練―

ベレーシート

●雅歌は「花婿と花嫁」の愛のかかわりを描いたものです。これは新約時代に現わされる「キリストと教会」のかかわりを示唆するものであり、かつ、預言的な歌です。雅歌に描かれている花婿と花嫁のかかわりは常に進展し、より成熟したかかわりへと花婿は花嫁を導きます。雅歌 3 章 1～4 節、および 5 章 2～6 節は、花嫁により高い段階の成熟したかかわりをもたらすために、花婿は花嫁に「霊的な夜」を経験させるのです。

●花嫁の成熟は、以下のフレーズが A から B へと、花嫁中心から花婿中心へと変化していることから分かります。

A

【新改訳 2017】

①雅 1:13 私の愛する方は、私にとって、・・・・

②雅 2:16 私の愛する方は私のもの。私はあの方のもの。

B

①雅 6:3　私は、私の愛する方のもの。私の愛する方は私のもの。

②雅 7:10　私は、私の愛する方のもの。あの方は私を恋い慕う。

●A―①の段階では、花婿は花嫁にとっての楽しみであり、花嫁は自分中心にしか意識していません。しかし A－②では、花嫁は自分自身が花婿に属していることに気づきます。B－①は、A－②と同じ言葉を使いながらも、順序が逆転しています。つまり、花婿が第一で、自分は第二なのだと自覚します。最後の B－②では、完全に、花嫁は花婿のものであり、花婿の関心の的であることを知るのです。

●A と B のフレーズの違いは花嫁の成熟度が変化していることを表しています。そしてその背景には、そのように花嫁をより高い成熟に向かわせようとしている花婿がいるのです。

●雅歌 3 章 1～4 節を見てみましょう。

【新改訳 2017】雅歌 3 章 1～4 節

1 私は夜、床についていても、私のたましいの恋い慕う方を捜していました。**私が捜しても、あの方は見つかりませんでした。**

2 「さあ、起きて町を行き巡り、通りや広場で、私のたましいの恋い慕う方を捜して来よう。」**私が捜しても、あの方は見つかりませんでした。**
3 町を行き巡る夜回りたちが私を見つけました。「私のたましいの恋い慕う方を、お見かけになりませんでしたか。」
4 私は彼らのところを通り過ぎると間もなく、私のたましいの恋い慕う方を見つけました。私はこの方をしっかり捕まえて放さず、ついには私の母の家に、私を身ごもった人の奥の間に、お連れしました。

●**「私が捜しても、あの方は見つかりませんでした」**というフレーズは、1 節と 2 節に出てきます。雅歌の特徴のひとつですが、重複されるフレーズは強調表現です。しかし 4 節では、「私のたましいの恋い慕う方を見つけました」とあり、比較的早く、花嫁は花婿を見つけ出しました。ところが再び、「**あの方を捜しても、見つけることができませんでした**」というフレーズが 5 章 6 節に出てきます。これは、3 章の時よりも少々深刻なのです。

【新改訳 2017】雅歌 5 章 2～6 節
2 私は眠っていましたが、心は目覚めていました。すると声がしました。私の愛する方が戸をたたいています。「わが妹、わが愛する者よ。私の鳩よ。汚れのないひとよ。戸を開けておくれ。私の頭は露にぬれ、髪の毛も夜のしずくでぬれているので。」
3 私は衣を脱いでしまいました。どうして、また着られるでしょう。足も洗ってしまいました。どうして、また汚せるでしょう。
4 私の愛する方が、戸の穴あたりに手を差し入れ、私の胸は、あの方のためにときめきました。
5 私は起きて、私の愛する方のために戸を開けようとしました。私の手から没薬が滴り、私の指から没薬の液が、かんぬきの取っ手に流れ落ちました。
6 愛する方のために戸を開けると、愛する方は、背を向けて去って行きました。私は、あの方のことばで気を失うばかりでした。あの方を**捜しても見つけることはできませんでした。**あの方を呼んでも、あの方は答えられませんでした。

●ここでは、突然、花婿が戸のかたわらに立ち、中に入れてくれるように花嫁に頼みます。ところが花嫁は「私は衣を脱いでしまった。どうして、また着られるでしょう。足も洗ってしまいました。どうして、また汚せるでしょう。」と言い訳をして、「戸を開けておくれ」という花婿の要求を拒みます。そのため花婿が自分で戸の穴あたりに手を差し入れ、かんぬきを開けようとしたので、花嫁は耐え切れずに起きて戸を開けようとしました。しかし戸を開けると、花婿はもうそこにはいませんでした。背を向けて去って行かれたのです。花嫁は花婿を捜しますが、見つけることはできませんでした。それどころか夜回りたちに見つかり、花嫁は心傷つけられてしまいます(7 節)。

●雅歌において、花婿と花嫁は相思相愛の関係です。ですから、「あの方を捜しても見つけることはできませんでした。あの方を呼んでも、あの方は答えられませんでした。」というのは尋常ではないのです。なぜ花嫁が花婿を受け入れることを拒んだのか。なぜ花嫁は一度拒絶したにもかかわらず、気持ちを変えて立ち上がったのか。花嫁が花婿のために戸を開けようとした時、なぜ花婿が立ち去ったのか。謎です。しかしその謎の中に深い花婿の真意が隠されているように思います。

1. 夜(暗やみ)の中で花婿を探し求める花嫁

●花嫁にとって花婿の姿を見失うことは一大事です。そのために花嫁は彼を捜し求めようとします。この「捜し求める、捜す」と訳された動詞は「バーカシュ」(בָּקַשׁ)です。「バーカシュ」は、理性的に尋ね求める「ダーラシュ」(דָּרַשׁ)

とは異なり、むしろ心情的な意味において慕い求めることを意味します。しかもその「バーカシュ」が 3 章では、強意形のピエル態で 4 回も使われているのです。花嫁がどんなに熱心な気持ちで花婿を捜し求めたかが伺えます。また、夜に床から起き出して、町や通りや広場を「行き巡る」という動詞(「サーヴァヴ」סָבַב)も強意形のピエル態なのです。つまり、必死になって探そうとする花嫁の姿を彷彿とさせます。5 章では、花嫁が「捜す」という言葉は 1 回しか出てきませんが、事態は 3 章よりも深刻なのです。

●3 章 1～4 節、5 章 2～6 節、いずれも舞台は「夜」(「ライラー」לַיְלָה)です。その**「夜」は花婿と花嫁のかかわりにおける「霊的な夜」を意味しています**。そして、その夜々(複数)の中で花嫁は愛する方を探し求めるのです。これは何を意味しているでしょうか。花嫁に背を向けて立ち去った花婿の真意とは何でしょうか。それは、花嫁をある霊的レベルで満足させず、より高い霊的なレベルに花嫁を導くためであったと考えられます。花嫁がさらなる飢え渇きをもって花婿を慕い求めて、花婿を尋ね求めるようにと招いておられるということなのです。

●マリヤ福音姉妹会の M・バジレア・シュリンク女史はその著『聖所の光に至る道』(カナン出版、1999 年)の中で次のように記しています。
「夜を通り抜けた魂から出る光は、イエスが暗闇のただ中に灯された光なのです。・・夜空が月と星々の輝きを現わすように、霊的な夜に無となった魂は以前にもまさるすばらしい透明さと純粋さをもって、神の御霊の働きを反映するのです。魂が最も清められるのは夜です。ですから、**神はその愛する選ばれた者たちすべてを夜の中に導かれます**。」(53 頁)

2. イスラエルの歴史における「夜」の経験

●「神はその愛する選ばれた者たちすべてを夜の中に導かれる」とすれば、それはイスラエルの民に対しても同様です。イスラエルの民がエジプトを脱出したあと、シナイ山で神と合意の上で夫婦としての契約を結びます。女が男から造られたように、イスラエルの民は神によって創造された民です。夫である神はイスラエルの民を通してご自身の栄光を現わそうとされました。ですから、神は彼らを導いてそのような民となることができるように育てる責任があるのです。神が訓練を通して、イスラエルの民をご自身にふさわしい妻として成熟するように導かれます。そして、その訓練の第一段階がイスラエルの中にある罪をきよめるためにもたらされた「夜」を通してでした。その例を民数記の中からいくつか挙げてみたいと思います。

(1) モーセを非難したミリアム

●民数記 12 章は、自分に与えられている持ち場、立場が不明瞭に思える時、引き起こされる問題です。それは民ではなく、モーセの姉ミリアムが抱えた問題でした。表面的にはモーセの妻が異邦人であることの非難でしたが、その非難の真相はモーセに与えられている特別な立場に対する嫉妬でした。なぜなら、モーセはいつでも神のところに出入り自由であったからです。

●アロンはモーセの代弁者として神のことばを語りましたが、神から直接に語られるということは稀でした。ミリアムはエジプトを脱出したあと、「女預言者」としてタンバリンを手に取り、同じくタンバリンをもった女たちとともに賛美を導き、「主に向かって歌え。主はご威光を極みまで現され、馬と乗り手を海の中に投げ込まれた」と歌いました。ミリアムには「女預言者」としての指導的カリスマが与えられていたようです。しかし、彼女が自分の立場を見失ったとき、自分にはない特別な立場をもっている弟のモーセを妬ましく思うようになったのです。

●そのことを知った主は、「アロンとミリアム」を自分のもとに呼び、モーセに与えられている特別な立場を擁護し、彼らを非難されました。そしてミリアムはツァラアトに冒され、宿営の外に締め出されました。兄のアロンが悔い改め、モーセに対してミリアムのためのとりなしを願ったので、モーセは彼女がいやされるように祈りました。結果としては、ミリアムは七日間、宿営の外へ締め出しを喰らいましたが、そのあとでいやされました。民はそれを見守っていたようです。なぜなら、これは単に兄弟間の問題ではなく、民全体の教訓となるべきものであったからです。

●ミリアムの出来事に象徴される「権威に対する反逆」の問題が、もしキリストのからだである教会に起こると、教会はキリストの栄光を現わすことのできない「夜」が訪れます。ミリアムの場合は七日間で済みましたが、より長期にわたる場合があるのです。

(2) コラと共謀した者たち

●民数記 12 章のミリアムの出来事は個人的でしたが、民数記 16 章では同じ問題が民衆レベルとなった事件が発生します。それはレビ人の中で幕関係を運ぶことに任じられたゲルション族の中のコラが、不満分子であるルベン族のダタンとアビラム、さらにオンと共謀して、なおかつ会衆から選ばれた指導者たち 250 人とともに、モーセに「立ち向かい」をしたことです(1～2 節)。コラやルベン族の 3 人の者たち、そして 250 人の指導者たちのそれぞれの言い分は異なっているのですが、新約時代のパリサイ派とサドカイ派、そして律法学者たちがそれぞれ強調している点は異なっていても、イエスに対する反抗は共通していたことから、共謀してイエスを捕えようと画策したように、共通の敵を持つことで共謀するという行為は昔も今も変わらない現実です。なぜルベン族はコラと共謀できたのでしょうか。それはコラが、イスラエルの長子であるルベン族には神からの権威というものがなんら与えられていないという不満を煽ったからです。またコラが 250 人の会衆の指導者たちに対して「会衆はみな聖なるものであり、モーセとアロンだけが特別な地位にいるのは不当であり、民主的ではない」と思わせたことによります。コラ自身の反逆の理由は、アロンとその子孫に与えられているような祭司職にあずかりたいと考えたからです。このようにしてモーセとアロンに対して立ち向かう共謀する仲間を作り上げました。案の定、権威に反逆したコラ、および彼と共謀した者たちはみな、地面が割れて「生きながら、よみに下る」という神のさばきを受けました。主はこの出来事を他の者たちの教訓的なしるしとするために、共謀者らが神の前に近づくためにもっていた青銅の火皿を打ち延ばし、主の祭壇のための被金(きせがね)とし、民が主にささげものをもって礼拝するときにいつもそのことを思い起こさせる「しるし」とされました。

●キリストの花嫁である教会にこのような問題が起こると、花嫁は主の栄光を現わすことができないばかりか、大き

な傷を後に残します。こうしたことは今日の教会にも起こっているのです。「霊的な夜」ですが、これも花嫁を成熟させるプロセスの痛み(布石)なのです。

(3) 12 人のカナンの地の斥候報告

●主がこの地(カナン)をあなたの手に渡されている。だから、上って行ってそこを「占領せよ」と言われているにもかかわらず、民たちが(しかも、こぞって)、その前にその地を探り、その報告を待ち帰らせましょうと提案し、モーセ自身もこの提案は常識的な考えと思ったようです。それを主に申し上げた時には、主はそのことを許可されました。おそらく、主は民たちを「試した」のだと言えます。イスラエルの民は「霊的な夜」を余儀なくされるのです。

●カナンの地に遣わされた 12 人が 40 日間にわたって調査した結果の報告によれば、二つのことが明らかとなりました。第一の情報は、神の与えた地が「乳と蜜の流れる地」であること、つまりその土地はきわめて肥沃であるということでした。その証拠として、彼らはふたりの者が棒で担がなければならないほどのぶどうの房(一房)を持ち帰りました。第二の情報は、その地に住む民は力強く非常に大きいこと、しかも、町々は城壁で囲まれているということでした。この二つの情報を元に、二つの異なる結論が出ました。ひとつは(ユダ族のカレブの判断)、「ぜひとも上って行き、そこを占領しよう。それができるから」というもの。もうひとつの結論は、「私たちはあの民のところに、攻め上れない」というものでした。きわめて常識的な判断から、カナンの地を偵察した結果がふたつに割れたのです。しかも(2 対 10)です。多数決によれば、「神がすでに与えてくださっている地を自分たちのものにはとてもできない」という結論に傾きました。これでは何のために神が彼らをエジプトの地から連れ出されたのか、皆目、わからなくなってしまうことになります。常識的に良かれと思ってしたことが、大変な事態(結論)を招いてしまったことになります。その事態とは、斥候として遣わされた 12 人の者たちで、ヨシュアとカレブの二人を除く 10 名のものは神にさばかれて疫病で死にます。そして彼らの影響を受けたすべての 20 歳以上の登録された者たちも、荒野で死ぬことが神によって定められました。偵察に要した 40 日の 1 日を 1 年にかぞえて 40 年間、彼らの背信の罪を償うために、やがて約束の地に入国する第二世代の者たちが 40 年間の放浪の旅を余儀なくされたのです。この 40 年間の放浪の旅におけるレッスンはただひとつ、それは「神に信頼して従う」ということでした。

●このように、イスラエルの民は 40 年間の「夜」を経験した後、次世代の者たちがカナンの地を、新しい指導者であるヨシュアに率いられて目指すことになります。

●これと似たような「霊的な夜」が 40 年どころか、400 年近くにもわたって訪れるのです。前述のカナン侵入前に斥候を送る提案をモーセが主に申し上げた時には、主はそのことを許可されました。おそらく、主は民たちを「試した」のだと言いましたが、これと似たような話がサムエル記の中に出てきます。それは、当時、軍事国家であったペリシテの侵入を恐れ、その危機感からイスラエルの長老たちがみな集まり、預言者サムエルの前に「他の国と同じように私たちにも王を与えてください」と懇願しました。サムエルはこの要求を気に入りませんでしたが、主は「民の声を聞き入れよ」と言われました。民のこの要求は人間的に考えるなら常識的に思いますが、神にとっては自分が退けられたということを知っていたのです。神は長い時間をかけて、民が要求していることがどういうことかを思い知

らせようとします。つまり、民の要求が、結果的に、自分たちの国を滅ぼす道を造り出すようになることを、神は体験的に教えようとされたのです。

●以上、民数記の中からイスラエルの民が経験した罪がもたらす「霊的な夜」についていくつか取り上げました。これらはみな、神がイスラエルの民をきよめて、真に神を求めさせ、神を知るようにさせるための恵みの訓練でした。それは見るからに、イスラエルの民のうちにある罪から来る「霊的な夜」です。しかしこの「霊的な夜」の経験を通して、神はイスラエルの民を通してご自身の栄光を現わそうとされたのです。ひとたび選んだイスラエルの民を妻としてふさわしく整えるのは夫である神の務めなのです。この務めは、神のご計画において最後の最後(メシアの地上再臨)の直前まで続けられて実現に至らせるのです。それは神の熱意によるものです。

●このように、私たちが民数記を読む時、常に心に留めていなければならないことは、使徒パウロがコリントの教会の人々に語ったように「これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たち(=キリストの花嫁)への教訓とするためです。」(Ⅰコリント 10:11)ということです。

3. 罪によらない「霊的な夜」の経験―使徒パウロの人生における特別な「夜」の経験を通して

●使徒パウロの人生を見るとき、特別に意味をもった「ある夜」があったことを使徒の働きは記しています。最初の「夜」の経験、これは「ある夜」とは記されていませんが、ダマスコ途上でキリストに出会って彼の目が見えなくなったとき、その暗闇の中でパウロは「主よ、私はどうしたらよいでしょうか」と尋ねています。それまでは自分が正しいと思ったことはどこまでも熱心にやってきた彼でしたが、ここでは完全に自分の生きるべき方向を見失っています。その時の祈りがこの祈りでした。「ダマスコに行きなさい。あなたが行うように定められているすべてのことが。そこであなたに告げられる」と主から言われて、パウロはダマスコへ行きます。そしてそこで目からうろこのようなものが落ちて新しいパウロが誕生したのです。これはパウロの罪がもたらした「夜」の経験でしたが、そうではない「夜」が彼の生涯におよび、それが神のご計画における新たな段階へと進ませたのです。そのことを見て行きたいと思います。

●パウロの信仰生涯の中で冠詞を伴った特別な「夜」があるのは、使徒 16 章 9 節、および 18 章 9 節、23 章 11 節の三回ですが、それぞれ「幻」によって、「幻の中の主の声」によって、直接主の声によってみこころが示されていきます。使徒 16 章 9 節では、行くべき方向性についての指示、18 章 9 節では、継続すべき務めについての指示、23 章 11 節では、パウロに対する神の最終目的の指示、–これらが示されていきます。この使徒パウロが経験した「夜」とは、「神はその愛する選ばれた者たちすべてを夜の中に導かれます」とバジレア・シュリンクのいうところのものです。パウロは神のご計画(ヴィジョン)が実現するために、より成熟した者とされていきました。神とイスラエルの民との仲介役がモーセであったように、パウロは花婿なるキリストと花嫁なる教会の仲介役として選ばれました。その彼がこう言っています。

【新改訳 2017】Ⅱコリント 11 章 2 節

私は神の熱心をもって、あなたがたのことを熱心に思っています。私はあなたがたを清純な処女として、一人の夫キリストに献げるために婚約させたのですから。

●パウロが経験した夜は個人的なことかもしれませんが、それはすべて花嫁の模範的存在となるためです。キリストの花嫁である教会も、さまざまな熱心な働きや多くの集会、行事をしながらも、時として花婿を見失ってしまうことがあるのです。いや、そのことに気づかないでいることさえ多いのです。しかし、それに気づいてどこまでも探し求めて見つけた花嫁は幸いです。パウロが経験したダマスコ経験や八方塞がりの状態、危険などは神が備えた「夜」でした。しかしそれは、花婿をどこまでも探して新たに見いだすための「夜」なのです。そんな視点から見ると、雅歌5章で花婿を見失った花嫁は花婿を見出すことができたのでしょうか。6章2～3節を見たいと思います。

【新改訳2017】雅歌6章2～4節
2 私の愛する方は、自分の庭へ、香料の花壇へ下って行かれました。園の中で群れを飼うために、ゆりの花を摘むために。
3 私は、私の愛する方のもの。私の愛する方は私のもの。あの方はゆりの花の間で群れを飼っています。

●6章2節で、花嫁は「私の愛する方は、自分の庭へ、香料の花壇へ下って行かれました。」と語っています。「庭」は「園」を意味する「ガン」(גַּן)という原語です(新改訳2017では6:2の後半の「庭」が「園」に訳されています)。とすれば、それはやがて花嫁と共に住むことになるパラダイスです。その園の中で花婿は自分の群れを飼うために、ゆりの花を摘むために行かれました。どうしてそのことを花嫁が知ったのかは記されていませんが、求める者にしか示されることのない幻を花嫁は見せられたのかもしれません。いまだ花婿を探し当ててはいないものの、花婿がどこにいるかがわかっただけでも花嫁にとっては大きな慰めなのです。

●花婿が自分の「園の中で群れを飼うために、ゆりの花を摘むために」とはどういうことでしょう。3節の後半でも花嫁は「あの方はゆりの花の間で群れを飼っています」と語っています。似たような表現が二度も記されているのは強調表現です。フランシスコ会訳は「庭の中で戯れ、ゆりの花を摘むために。」「あの方のゆりの花の間で戯れていらっしゃいます。」と訳しています。原語「ラーアー」(רָעָה)には、「群れを飼う」という意味と、「戯れる(=交わること)」という意味の二つがあります。新改訳は前者の意味で訳し、フランシスコ会訳は後者の意味で訳しています。しかしここはフランシスコ会の方が適訳のように思います。なぜなら、「ゆりの花」とは神に選ばれた者たちの象徴であり、その者たちと花婿が親しく交わっている情景を描いているように思えるからです。その幻を見た花嫁は安心したはずです。イエシュアが後に、「なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。・・」と言って話したことがあります(マタイ6:28)。その「野のゆり」もヘブル語では「シューシャン」(שׁוּשַׁן)の複数形です。新共同訳は「野の花」と訳していますが、それではここの本当の意味が伝わりません。「ゆり」でなければならないのです。イエシュアは弟子たちと野に咲く「ゆり」の花を掛けて語られたのです。「ゆりの花」は神に選ばれた者たちのことなのです。

ベアハリート

●最後に、「花嫁」のことをヘブル語では「カッラー」(כַּלָּה)と言います。雅歌では４章８節を初めとして全部で６回使われています。右の図を見ても分かるように、「カッラー」は「花嫁」という意味だけでなく、「切望」「完成・成就」、そして「滅亡・絶望」という意味があるのです。このように、一つの語彙に**両義性**があるのはヘブル語の特徴です。それは神のご計画に「救い」と「さばき」が内包されているからです。

●花嫁の存在は、花婿を切望することによって、花婿が支配する御国を完成させ、成就させる「ふさわしい助け手」なのです。しかしその完成の暁には、神のご計画に従わなかった者たちには「滅亡」が余儀なくされるのです。それゆえ花嫁は花婿を尋ね求めることを通して、より成熟した花嫁へと成長することで、そのことによって花婿の栄光を証しし、神に立ち返る者たちが起こされることを祈らなければならないのです。

〔2015.9.6〕
2018/11/29 改定

シリーズ「キリストの花嫁」No.8(改定)

ブライダル・パラダイム
(7)

「子羊の婚礼」(「ハトゥナット・ハッセー」חֲתֻנַּת הַשֶּׂה)

【聖書箇所】　エペソ人への手紙 5 章 25～27 節

ヨハネの黙示録 19 章 6～9 節

ベレーシート

●昨日(2015/9/19)で、約 1 か月間続いた「雅歌」の瞑想が終了しました。注解書の数だけ解釈があると言われる「雅歌」ですが、終始、やがて啓示される「花婿なるキリストと花嫁なる教会」の愛のかかわりを啓示する預言的な歌として味わって来ました。雅歌に描かれている花婿と花嫁のかかわりは常に進展し、より成熟したかかわりへと花婿は花嫁を導きますが、前回は、花嫁により高い段階の成熟したかかわりをもたらすために、花婿は花嫁に「霊的な夜」を経験させるということをお話しいたしました。今回は、そうした経験の先にある最終目的に目を向けます。つまり、教会を聖なるものとし、「ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった**栄光の教会**を、ご自分の前に立たせる」(新改訳 2017、エペソ 5:27)ことなのです。

●花嫁である今日の教会を、「しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖なるもの、傷のないもの」とはとても思えないかもしれません。とても自信をもって言えるような状態でないことは、クリスチャンであれば、だれでも感じているところです。教会には実に多くのしみがあり、しわがあり、傷があります。ところが主は、そのような教会を養い育てて、また整えて、やがては、ご自分の前に栄光の教会として立たせるのです。なぜなら、それが神の永遠のご計画だからです。この神のご計画を花嫁である私たちはよく理解しなければならないのです。神が実現に至らせるのです。ですから、私たちは目先にある現実だけを見ているのではなく、神のご計画の最終目的を常に、絶えず、視野に入れることが重要なのです。このことが「ブライダル・パラダイム」の必要性の所以です。

●エペソ人への手紙 5 章 22～30 節は、夫と妻の義務について教えている箇所ですが、パウロはその義務をキリストと教会の関連性をもとにして論じようとしています。しかし、ここでは夫と妻の義務についての教えを一旦脇へ置いて、「ブライダル・パラダイム」を理解するために、キリストの教会に対する義務について考えてみたいと思います。

【新改訳 2017】エペソ人への手紙 5 章 25～30 節より抜粋

25 ・・・キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられた・・

26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、

27 ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、
ご自分の前に立たせるためです。

29 いまだかつて自分の身を憎んだ人はいません。むしろ、それを養い育てます。

キリストも教会に対してそのようになさるのです。
30 私たちはキリストのからだの部分だからです。

1. 栄光の教会の姿

●「栄光の教会」という用語は工ペソ書 5 章 27 節にしか使われていませんが、似た思想はあります。例えば、

(1) ローマ人への手紙 8 章 30 節【新改訳 2017】
神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちには
さらに**栄光をお与えになりました**。

(2) ピリピ人への手紙 3 章 20～21 節【新改訳 2017】
20 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、
私たちは待ち望んでいます。
21 キリストは、万物をご自身に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、
ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。

●上記のことは全体としての教会においても、またそこに属する一人ひとりも同様に栄光を受けるのです。栄光を受けた教会とは、まさに(消極的表現ですが)、しみもしわもない、汚れも傷もない状態です。私たちには少々理解しがたいところですが、栄光を受けた状態になると、教会はひとつのしみもしわも、ひとつの汚れも傷もなくなるのです。

●しわやしみは老齢のしるしです。人の脂肪の数は生涯変わらないそうですが、年齢が進むにつれて、その脂肪の細胞がつぶれるためにしわが増えるのです。ある種の疾患のゆえに脂肪層が減少することでしわを生むことにもなります。この世にある教会の中にはそうしたしわが多くなって、活力のない教会として見えるようになります。しわはいろいろな機能が減退したしるしでもあるのです。ところが、感謝すべきことに、花婿なるキリストが教会をご自分の前に立たせる大いなる日が来ると、皮膚は若者のように回復してひとつのしわもない状態になるのです。みずみずしい肌となるのです。つまり、若さが再び回復するのです。しかも永遠にその状態が続くのです。これが栄光のからだに変えられることの意味です。しわだけでなく、からだのあらゆる疾患や欠陥がなくなり、朽ちることのないからだに変えられて、永遠の若さをもって生き続けるのです。「【主】を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように、翼を広げて上ることができる。走っても力衰えず、歩いても疲れない。」(新改訳 2017、イザヤ 40:31)ということが、やがて「主の前に立つとき」に起こるのです。想像をはるかに超えた「良きおとずれ」(福音)です。

●これは外面的なことですが、内面も同様です。その日のために、花婿は花嫁である教会をたえず養い育て、整え続けているのです。雅歌は「ブライダル・パラダイム」の宝庫ですが、その最後の章に、花嫁が「わたしは城壁です」という告白があります。少し、その部分を見てみましょう。

【新改訳 2017】雅歌 8 章 8～9 節

8 私たちの妹は若く、乳房もない。私たちの妹に縁談のある日には、彼女のために何をしてあげようか。
9 もし彼女が城壁だったら、その上に銀の胸壁を建ててあげよう。彼女が戸だったら、杉の板でおおってあげよう。

●雅歌 8 章 8～9 節では、花嫁は兄たちから見ると、まだ未成熟で、自分たちの妹に縁談の話があった日には、実際、何をしてあげようかと心配しているのです。もし、彼女が「城壁だったら」「戸だったら」(これらは**純潔**を意味する表現です)、さらにしっかりと彼女を守ってあげようという意味で、「城壁の上に銀の胸壁を建ててあげよう。杉の板でおおってあげよう。」と表現しています。兄たちは妹が花婿に喜ばれるように彼女の純潔を守るための支えとなろうとしているのです。ところが 10 節で、花嫁は「私は城壁、私の乳房はやぐらのよう。そのために、私はあの方の目には平安をもたらす者のようになりました。」と言っているのです。兄弟たちの心配をよそに、「私は城壁」という表現は、この世のものに目に奪われることなく、花婿に対する純粋な心を持って花婿を十分に満足させるほどに成熟していることを語っているのです。言わば、花婿の助けによって、花嫁の内面が愛のうるわしさで満ちていることを意味しています。

(1) 花嫁の務め

●エペソ書 5 章に戻って、「29 いまだかつて自分の身を憎んだ人はいません。むしろ、それを養い育てます。キリストも教会に対してそのようになさるのです。30 私たちはキリストのからだの部分だからです。」(新改訳 2017)とあります。「養い育てる」という「サルポー」(θάλπω)というギリシア語は新約聖書では二回しか使われていません。「世話をする、面倒を見る、保護する、配慮する」という意味を持っています。それゆえ、花嫁に対する花婿の関心や配慮について、花嫁はよく理解する必要があるのです。その中で花婿の愛を知ることこそが花嫁の務めと言えます。

(2) 花婿の務め

●花嫁の聖化が促進させられるのは、やがて来る栄光の日(=携挙)に、主が花嫁に対してなさろうとされることを知ることによってです。その日には、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、花婿なる主がご自分の前に立たせます。この究極の目的を知ること、これが花嫁をより聖くさせる誘因となると信じます。とはいえ、この働きもすべては花婿の恵みによるものであることは言うまでもありません。なぜなら、みことばと御霊によって、花嫁を養い育てることが花婿の継続的な務めだからです。

2. 子羊の婚礼の喜び

●花嫁である教会が栄化されるのは、花婿との婚礼のときです。そのときには爆発的な喜びが起こります。

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録 19 章 6～8 節

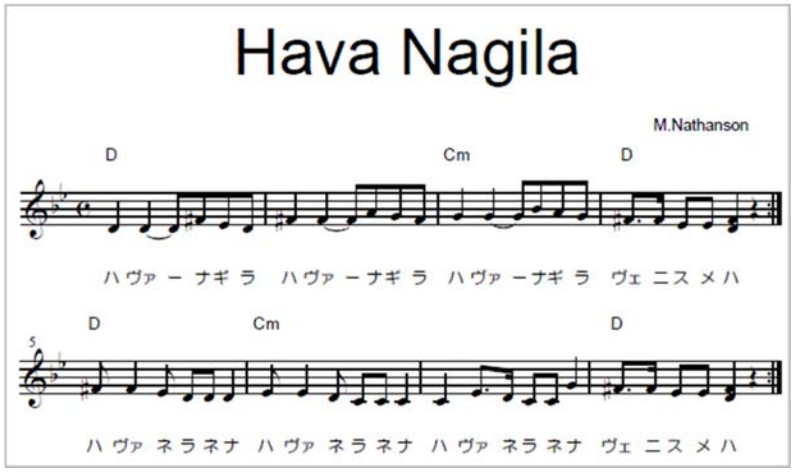
6 また私は、大群衆の声のような、大水のとどろきのような、激しい雷鳴のようなものがこう言うのを聞いた。
「ハレルヤ。私たちの神である主、全能者が王となられた。
7 私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。子羊の婚礼の時が来て、花嫁は用意ができたのだから。
8 花嫁は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」

●「メゴサレ」(Me Gozare)という賛美は、この黙示録 19 章 7～8 節から取られています。7 節の「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。」と訳されています。ヘブル語に戻すと、「喜び踊ろう、喜ぼう。私たちは主に栄光をささげよう。」となっています。

「ナーギーラー・ヴェニスメハー・ヴェニッテーン・ロー・カーヴォード」(左から読む)

נָגִילָה וְנִשְׂמְחָה וְנִתֵּן לוֹ כָּבוֹד

●ここには「喜び踊ろう」という意味の「ギール」(גִּיל)と、「喜ぼう」という意味の「サーマハ」(שָׂמַח)の二つの動詞があります。人称は 1 人称未完了女性複数。ちなみに、イスラエルには「ハヴァ・ナーギーラー」という婚礼の時に歌われる有名な曲があります。その歌の歌詞には「喜び」を表わす三つの動詞が使われています。



●上記の部分の楽譜はこの曲の前半部分です。後半もあるのですが、ここでは割愛します。

(1) 小躍りして喜ぶ、歓声を上げることを意味する「ギール」(**גִּיל**)

(2) 喜び祝う、喜び楽しむことを意味する「サーマハ」(**שָׂמַח**)

●聖書の詩篇では「サーマハ」(**שָׂמַח**)と「ギール」(**גִּיל**)は、しばしばワンセットで用いられます。

(3) 大声で喜び叫ぶ、声高らかに歌う、喜びの声を上げることを意味する「ラーナン」(**רָנַן**)

●「ヒンネー・マー・トーヴ」だけでなく、この「ハヴァ・ナーギーラー」もぜひ踊りたいものです。

●黙示録 19 章に戻りますが、なぜ神に栄光をささげるのかと言えば、その理由は待ちに待った子羊の婚礼の時が来たからです。また花嫁もその用意ができたからです。8 節に「花嫁は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」とあります。これはどういうことでしょうか。特に、「聖徒たちの正しい行い」とはどんな行いなのでしょうか。

●「花嫁はその用意ができた」とは、「花嫁は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された」ことを意味しますが、「花嫁はその用意ができた」という部分をヘブル語に訳すと、「ヒットカッダーシャー」(**הִתְקַדָּשָׁה**)となっています。これは「聖なるものとなる」という意味の「カーダシュ」(**קָדַשׁ**)の強意形のヒットパエル態で、「自らを聖別する、自らきよめる」という意味になります。つまり、花婿のために取り分けられた歩みを花嫁が自らしてきたことを意味します。まさに、**花婿のものとして自分を「聖別する」生き方を、主体的に自覚的にしてきたことを意味します。**このことを「花嫁はその用意ができた」と表現しているのです。みことばと御霊の助けを通して、花嫁は花婿のものとなるために、すべてのことをしてきたのです。それゆえ、花嫁は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された (=「着るようにと(花婿から)与えられた」)のです。なぜならその「輝くきよい亜麻布」とは、「聖徒たちの正しい行い」のことだからです。花婿の心を求め続け、慕い求め続けてきた花嫁の行いが、輝くきよい亜麻布を着ることを得させたのです。すべて、主権は花婿にあります。花婿であるキリストは花嫁である教会を愛して、ご自身をささげられ、最高のぶどう酒(ご自身の血)をもって婚約しました。その花嫁をみことばと水の洗いをもってきよめて聖なるものとし、やがて、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるのです。それゆえ、以下のとおりなのです。

【新改訳 2017】ユダの手紙 24～25 節

24 あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びとともに
栄光の御前に立たせることができる方、

25 私たちの救い主である唯一の神に、私たちの主イエス・キリストを通して、栄光、威厳、支配、権威が、
永遠の昔も今も、世々限りなくありますように。アーメン。

● 「大水もその愛を消すことができません。奔流もそれを押し流すことができません。」 (雅歌 8:7)とあるように、神によって定められた花婿と花嫁の愛は、どのような大水も奔流も、これを押し流したりすることはできないのです。神のご計画は決してぶれることなく、確実に完成するのです。

2015.9.20

改定 2018/11/29

シリーズ「キリストの花嫁」No.9(改定)

ブライダル・パラダイム
(8)

「二人は一体となる。この奥義は偉大です。」

【聖書箇所】エペソ人への手紙 5 章 31～32 節

創世記 2 章 24 節

ベレーシート

●「ブライダル・パラダイム」ということばの意味は、キリストと教会とのかかわりを「花婿と花嫁」という視点で見る見方のことです。今回は、このかかわりが「一体」「一心同体」となるということは神のご計画における「奥義」(神秘、秘儀)であり、しかもその「奥義は偉大です」という点に目を留めてみたいと思います。まずは、創世記 2 章 24 節。そして エペソ人への手紙 5 章 31～32 節にあるみことばを見てみましょう。

(1) 【新改訳 2017】創世記 2 章 24 節
それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、**ふたりは一体となる**のである。
(2) 【新改訳 2017】エペソ人への手紙 5 章 31～32 節
31 「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、**ふたりは一体となる**のである。」
32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。

●「ふたりは一体となる」とは、偉大な奥義であるということです。その「ふたり」とは、直接的には「夫と妻」のことを意味しているのですが、その「夫と妻」の関係は、本来の偉大な奥義である「キリストと教会」の類比でしかないのです。つまり、本体は「キリストと教会」であり、その本体の影(コピー)が「夫と妻」なのです。

●当教会は「日本神の教会連盟」に属していますが、その連盟の「国内宣教委員会」が主導する新しい働きとして、今年 (2015 年)の夏から「次世代育成プロジェクト」という名称のミニストリーがスタートしました。このミニストリーの構想は神の永遠のヴィジョンと関連する壮大な大事業となる取り組みです。というのは、このプロジェクトを進めて行くためには、根底にある聖書的土台から取りかからなければならないからです。つまり、別の言い方をするならば、その土台が崩されているという現実から出発しなければならないからです。まさにこのプロジェクトはペルシャの王の検酌官(毒味役)であったネヘミヤのエルサレムの城壁再建にも匹敵すると言えるからです。ネヘミヤが城壁再建に取りかかる前に用意周到な準備をしたように、十分な準備の必要があると考えています。

●このプロジェクトの全体の構想は、次世代を担う者たちが、神のご計画(マスタープラン)のヴィジョンを実

現する者として整えられることです。そのためには、「御国の福音」をヘブル的・ユダヤ的視点と「ブライダル・パラダイム」の視点をもって理解することが求められます。そのためには、教会に集う次世代の子どもたちが神の啓示の舞台であるイスラエルの歴史を学ぶための、教会教育における変革が求められます。これだけでもかなりハードルが高くなってしまうのですが、さらにこのプロジェクトの最も根幹となる、優先順位の高い「家庭教育」に取り組む必要があります。この部分に取り掛かるためには、どうしても避けて通ることのできないものとして、聖書が教える「結婚」の奥義に触れなければならないのです。なぜなら、そこに神のご計画の隠された真理があるからです。その土台が崩れているなら、どんなに力を尽くしてもその働きはすべて水泡に帰してしまうからです。使徒パウロは次のように述べています。

【新改訳 2017】 I コリント 3 章 10～13 節

10 私は、自分に与えられた神の恵みによって、賢い建築家のように土台を据えました。ほかの人がその上に家を建てるのです。しかし、どのように建てるかは、それぞれが注意しなければなりません。
11 だれも、すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。
12 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、
13 それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。

●上記で語られている重要なことは、使徒パウロが「私は、自分に与えられた神の恵みによって、賢い建築家のように土台を据えました」と述べていることです。そして「その土台とはイエス・キリストです」と述べて、この土台の上にどのような材料で家を建てるかについてはそれぞれが注意しなければならないと述べているのです。その結果はすぐには分かりませんが、やがてそれぞれの働きは「その日」に明らかになるとしています。つまり、「その日」は火とともに現れて、それによっても残るような材料で建てられていたなら、その建てた者の働きは報いを受けると言うのです。揺るぎない土台の上に建てられる建物は、どのような火の力にも耐え抜くような堅固なものでなければならないのです。

●ところで、このキリストと教会のかかわりをブライダル・パラダイムの視点から考えると、そのかかわりの究極は、「一体」(「バーサール・エハーッド」בָּשָׂר אֶחָד)となることです。この真理を正しく教えることによって、次世代が聖書的な方法で「家庭教育」を施すことがはじめてできるということなのです。「社会教育」「学校教育」「家庭教育」の優先順位はこの順の逆です。聖書に基づく「家庭教育」を再建させることが実は最も困難な大事業なのです。

●この大事業に取り組むために、私はどうしても二つのことを、使徒パウロのように、人の顔を恐れずに言わなければなりません。その第一は「**人は父と母を離れる**」ということ。そして第二は、「**不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけない**」(Ⅱコリント 6:14)ということです。

1. 「人は父と母を離れる」ということ

●このことばだけを抜き出すなら、キリスト教は恐ろしい宗教だということになってしまい、つまずかれるかもしれません。創世記 2 章は、まだ人間が神に対して罪を犯す前に語られたことばであることを念頭に置きましょう。またエペソ人への手紙 5 章も、夫と妻とが二人とも主にある者(同じ土台を持つ者)という前提で書かれていること、そしてそこで語られていることが、神が当初から持っておられたご計画であると同時に、究極の目的であるということが背景にあるのです。

●エペソ人への手紙 5 章 31 節は、創世記 2 章 24 節の正確な引用となっています。
「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、**ふたりは一体となる**のである。」(創世記 2:24)
「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、**ふたりは一体となる**のである。」(エペソ 5:31)

●何故「人はその父母を離れなければならないのか」。ここで「離れる」と訳された原語は「アーザヴ」(**עָזַב**)で、「捨てる」という意味です。「わたしは、あなたに約束したことを果たすまで、決して見捨てない。」と言われるとホッとしますね。普通の人は・・。「では、約束したことが果たされると、見捨てるのか」と考える人はかなりひねくれた人です。「約束したことが果たされたとしても、決して見捨てない」というのが本当の意味です。「決して見捨てない」の反対の意味、すなわち「父母を離れる、父母を見捨てる」という意味で創世記の 2 章 24 節は使われているのですが、それには究極の目的が付されています。「父母を離れる」目的は、「**妻と結ばれ、ふたりは一体となる**」ためなのです。このことが重要なのです。「結ばれ」と訳された動詞は「あるものとあるものをくっつける、ある者にすがりつく」ことを意味する「ダーヴァク」(**דָּבַק**)で、神と人、および人と人のかかわりを表わすときに使われ、きわめて親密な一体性をうかがわせる動詞です。たとえば、モアブ人のルツが姑のナオミに「すがりついた」(「ダーヴァク」(**דָּבַק**)ことで、やがてイェシュア・メシアにつながるダビデが登場します。ルツが故郷を捨てて(離れて)姑のナオミに「ダーヴァク」したことがどんなにすばらしい結果をもたらしたか、そのストーリーはまさに圧巻と言えます(ルツ記)。そのようにして、異邦人とイスラエルは「一体」となったのですが、この「一体」が「エハーッド」(**אֶחָד**)なのです。使徒パウロが「この奥義は偉大です」と言っているのは、この「エハーッド」(**אֶחָד**)のことで、これが花婿なるキリストと花嫁なる教会との永遠のかかわりとして隠されていた秘密なのです。やがてその秘密は明らかにされ、花婿も花嫁も共に栄光を受けるのです。

●詩篇 45 篇は「王の詩篇」として知られていますが、その詩篇の中に以下のようなフレーズがあります。

【新改訳 2017】詩篇 45 篇 10～11 節

10 娘よ聞け。心して耳を傾けよ。あなたの民とあなたの父の家を忘れよ。
11 そうすれば王はあなたの美しさを慕うだろう。彼こそあなたの主。彼の前にひれ伏せ。

●ここでの「王」は花婿なるキリストのことを預言しています。「娘」は異邦人とイスラエルの民とから成る「教会」を預言しているかもしれません。「娘」(花嫁)は肉親への愛にも勝る花婿に対する愛が求められています。

●「父母を離れ」とか、「あなたの民(民族、親族、友人などを含む)とあなたの父の家を忘れよ」とかは、あくまでも、新しい夫とのかかわりを優先させるためです。文字通りに、「父と母を見捨てる(離れる)」ことではありません。聖書はむしろ、「あなたの父と母を敬え」と教えています。しかし結婚にこそ神の深いみこころがあるために、父母とのかかわりは優先順位において格下げされるのです。新たな夫婦は新しい家庭において、夫をかしらとして、妻はそのからだとしての秩序をもって築くようにと聖書は教えています。

●「救われるためには、何をしなければなりませんか」というピリピの看守の問いに対して、使徒パウロが答えた答えは、「主イエスを信じなさい(アオリストの命令―自覚的、主体的決断を求める命令)。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」でした。ここには家族の救いについての示唆があります。ここの看守は後で明らかになるように、一家族の家長です。つまり、家族の救いが保障されているのは、あなたをかしらとする「家族」です。その家族は自分の親や兄弟を含んでいません。自分から始まる家族に対する救いの保証です。それゆえ、ひとりの人の救いによって作られる家庭、女性であれば、主を信じる男性との結婚によって築かれる家庭に対する救いの保証がなされているのです。親戚や自分の兄弟たちに対するものではありません。主を中心とした家庭に対する救いの約束です。自分から始まる家庭の祝福です。ですから、結婚する前から、自分がやがて結婚してどのような家庭を築けばよいのかは、結婚する前からクリスチャンホームを築くことが神のご計画における偉大な召し(召命)なのだということを理解している必要があるのです。

●そのために、若いうちから結婚について(理想的には両親をモデルにして)学ばなければならないのです。なぜなら、「結婚」の「一体となる」という奥義(「ミュステーリオン」μυστήριον)は「偉大」だからです。「偉大」のギリシア語は「メガス」(μέγας)で、ヘブル語の形容詞「ガードール」(גָּדוֹל)と同義です。それは、「偉大な、大いなる、きわめて重要な、大切な」という意味です。つまり、結婚における「一体となる」という奥義は、メガ級レベル(当時として最大級の表現)のきわめて重要な神のヴィジョンと密接につながっている事柄なのです。このような概念は、この世の結婚観にはありません。結婚は、この世においては隠されているという意味で「奥義」なのです。つまり「奥義」は、主を信じる者にしか理解できない事柄だということです。

【新改訳 2017】Ⅱコリント 6:14
不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。
光と闇に何の交わりがあるでしょう。

2. 「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはならない」ということ

●聖書に基づく「家庭教育」を再建させるためには、第二のこと、つまり、「**不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません**」(【新改訳 2017】Ⅱコリント 6:14)という使徒パウロの教えを正しく理解する必要があります。この教えが意図していることは、キリストの花嫁が花婿であるキリストと「一体」となるという福音の奥義が、神の最終のご計画(ヴィジョン)と深くかかわっているからです。その神のヴィジョンと一致しない曖昧な教えはすべて排除されなければなりません。そのことは、特にすでに結婚してしまった者にではなく、これから結婚する者たちに対して教えなければならないことです。サタンはこの偉大な奥義を破壊するためにエバを、そしてアダムを誘惑したことを決して忘れてはならないのです。果たして私たちが、パウロの言うように、次世代のために、「福音の奥義を大胆に知らせることができるように」、「語るべきことを大胆に語れるように」、「私のためにも祈ってください」と言えるでしょうか。この祈りの要請の背景には、「福音の奥義を大胆に語る」には必ず戦いが余儀なくされるという現実があるからです。

●「ブライダル・パラダイム」への転換という取り組みは、花婿をひたすら慕い求めるという美しい面があると同時に、偉大な奥義の真理に立つという厳しい面があることを忘れてはならないのです。ですから、聖書的な「家庭教育」がなされるためには、真理に対する戦いという面がどうしても不可欠なのです。このことを曖昧にして、花婿を慕い求めることは偽善に陥ることになります。聖書的な健全な「家庭教育」を土台として初めて「教会教育」が力を持ってきます。さらに「連盟教育」が大きく実を結ぶことになると信じます。この教育の連鎖にある種の流れが作られるためには、忍耐と一貫した姿勢が求められます。それが可能となるために祈る必要があります。なぜなら、困難な大事業だからです。

●いつの時代であっても「子育て」は大事業です。この点、異邦人である私たちは、神の民であるユダヤ人たちがどのような教育をしてきたのか、偏見を持たずに、謙虚に学ぶことは良いことかも知れません。なぜなら、彼らは昔から伝統的に教育に熱心な民族であり、しかも旧約聖書には「子育て」や「教育」に関するすぐれた知恵が多く記されているからです。これからサムエル・ミニストリーでは「箴言」をゆっくりと瞑想していきますが、家庭教育をいかにして建てあげるべきか、その知恵を得るための瞑想となればと思います。その箴言の中から・・

① 「しっかりした妻は夫の冠」(【新改訳 2017】12:4)
② 「妻を見つける者はしあわせを見つけ、主から恵みをいただく。」(同、18:22)
③ 「家と財産とは先祖から受け継ぐもの、賢明な妻は主からのもの。」(同、19:14)
④ 「しっかりした妻をだれが見つけられるだろう。彼女の値打ちは真珠よりもはるかに尊い。」(同、31:10)

●箴言で、結婚について高く評価しているのはそこに神の奥義が隠されているからであり、唯一、それを破壊する力は姦淫の罪だけです。また親子の関係においても、「むちを控える者はその子を憎む者」(同、13:24)とあり、知恵を持つために厳しくしつけられる必要が教えられています。聖書は特に家庭の重要性について教えています。ですから、聖書によって家庭教育がなされるならば、「次世代育成プロジェクト」は間違いなく実を結ぶと信じますが、そのための準備にまごついていてはならないのです。なぜなら、子はすぐに大きくなって

いくからです。「子育て」においても「時」があるのです。その時を見逃すことなく、主にある両親のみならず、教会全体がこのことのために心を傾ける必要が、今の時代に求められているのではないでしょうか。

●**家庭教育は、結婚という聖書的な奥義に裏付けられなければなりません。**この領域が今日、敵によって最も激しく攻撃されています。聖書的土台が崩されていては、私たちは何も建て上げることはできないのです。まずそこから改革を始めなければならないのです。最後に、コリントに向けた使徒パウロの**「キリストの花嫁」の霊性**についての教えに耳を傾けましょう。

【新改訳 2017】Ⅱコリント 6 章 13～18 節、7 章 1 節
6:13 私は子どもたちに語るように言います。私たちと同じように、あなたがたも心を広くしてください。
6:14 **不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。**正義と不法に何の関わりがあるでしょう。
光と闇に何の交わりがあるでしょう。
6:15 キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。
6:16 神の宮と偶像に何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神がこう言われるとおりです。
「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。
6:17 それゆえ、**彼らの中から出て行き、彼らから離れよ**。――主は言われる――汚れたものに触れてはならない。
そうすればわたしは、あなたがたを受け入れ、
6:18 わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる。――全能の主は言われる。」
7:01 愛する者たち。このような約束を与えられているのですから、肉と霊の一切の汚れから自分をきよめ、
神を恐れつつ聖さを全うしようではありませんか。

●おそらく多くの者(クリスチャン)が、このような教えに対して現実にそぐわないという理由で反発を感じ、反対するかもしれません。しかしなぜ使徒パウロは、コリントの花嫁に対してこのようなことを書き記したのでしょうか。パウロ自身がその思いを以下のように述べています。

【新改訳 2017】Ⅱコリント 11 章 2～3 節
2 私は神の熱心をもって、あなたがたのことを熱心に思っています。**私はあなたがたを清純な処女として**、
一人の夫キリストに献げるために婚約させたのですから。
3 **蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、あなたがたの思いが汚されて、**
キリストに対する真心と純潔から離れてしまうのではないかと、私は心配しています。

●分離の命令の意図は、「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔から離れてしまうのではないか」という懸念があるからです。それゆえ、「不信者と、**つり合わないくびきをともにしては**」いけないのです。

〔2015.10.4〕
改定 2018.12.6

シリーズ「キリストの花嫁」No.10(改定)

ブライダル・パラダイム
(9)

「キリストの花嫁の特権」

【聖書箇所】　エペソ人への手紙 5 章 22～32 節、創世記 2 章 18～24 節

ベレーシート

●前回は、創世記 2 章 24 節にある「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである」という箇所をパウロが引用して、「この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。」(エペソ 5:32)と述べていることがどういうことかについてお話ししました。「この奥義」とは、「ふたりは一体となる」ことを指していますが、この「ふたり」とは「夫と妻」という範疇を越えて、「キリストと教会」のことを意味しています。こちらの方が**本体**なのです。キリストと教会とのかかわりを「花婿と花嫁」のかかわりとして捉える見方を「ブライダル・パラダイム」としてお話して来ましたが、そこに秘められた「奥義」(「ミュステーリオン」μυστήριον)は「偉大だ」とパウロは述べています。この「偉大」と訳されたギリシア語は「メガス」(μέγας)で、先にも後にも、どの世界においても、これ以上の奥義・秘義はあり得ないことを、パウロは「この奥義は偉大です」と表現したのです。パウロが生きていた時代の最大級の大きさを表す単位は「メガス」(μέγας)でした。

●私が昔聞いた「メガトン」という単位は、原爆の威力を表わす単位でした。1 メガトンとはどれほどの威力を表わすのでしょうか。広島に落ちた原爆は一瞬にして広島を消滅させてしまうほどの威力でしたが、それでもその威力は、0.014 メガトンだそうです。1 メガトンとはその 100 倍です。アメリカがビキニ環礁で行った水爆実験は広島に落ちた原爆の約 700 倍の威力だと言います。まさに、「途方もない」「桁外れ」の威力です。使徒パウロが「この奥義は偉大です」と語ったのは、それが人間の理解力をはるかに越えたこの上もない神の事柄だということを言おうとしたのだと思います。パウロという人はその手紙などでも分かるように、最大級、最上級、最大限、無限大の表現を多く使うのが特徴です。それもそのはず、神の奥義を啓示された彼としては、そうした表現しかできなかったはずです。例えば、エペソ人への手紙の 3 章の最後にある部分を神の偉大さを次のように表現しています。そこの箇所をリビングバイブルで読んでみたいと思います。

「どうか、私たちのなしうるかぎりの祈り、願い、考え、望みを無限に超えて、つまり、私たちが大胆に願い求め、夢見ることもはるかに及ばないすばらしいことを、その偉大な力でなされる神様に、栄光がありますように。」

●「私たちのなしうるかぎりの・・・を無限に超えて、私たちが・・夢見ることもはるかに及ばない・・をその偉大な力でなされる神」という表現は、まさにメガトン級的表現です。パウロの手紙を見ると、「絶大な」「きわめて」「はるかに」「(人知では)測り知ることのできない」「あふれる」「ますます」を意味する「ヒュペル」

(ὑπερ)のついた合成語が数多く用いられています。なぜなら、すべての領域における神のみこころとその御旨、そのご計画の緻密さとその深さ、キリストにある無尽蔵な富を知り尽くすことなど、とてもできないからです。

【新改訳 2017】ローマ人への手紙　11 章 33 節
ああ、神の知恵と知識の富は、なんと深いことでしょう。
神のさばきはなんと知り尽くしがたく、
神の道はなんと極めがたいことでしょう。

●知恵にしても、知識にしても、さばきにしても、道にしても、すべてが知り尽くしがたく、極めがたいのですが、**重要なことは、それらすべての根源がどこにあるかということです**。「この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。」(エペソ 5:32)というパウロのことばの源泉がどこにあるのか、どこからはじまっているのか、そこに目を向けたいと思います。パウロという人はそのようなことに、殊の外、関心を抱いた人物です。それゆえに、彼にこそ「奥義」が開かれたとも言えます。

1.　神のご計画の中心は、御子に花嫁を与えることであった

●「**神のご計画の中心(あるいは目的)は、御子に花嫁を与えることであった**」ということを聞いて驚かれた方はすばらしい人です。驚かなかった方はその逆です。この命題について、即座に、「アーメン」と言えた人はすごい人です。なぜなら、その人は神のみこころ、すなわち、神の創造の究極的目的である「奥義」に触れているからです。キリストの十字架の死と復活の出来事も、まさにその目的の実現のために不可欠な出来事であったに過ぎません。神の福音は「キリストの十字架と復活」であることには間違いありませんが、それが神の究極の福音ではありません。神の究極の福音とは、花婿なるキリストと花嫁なる教会が「一体となる」ことなのです。このことは人間が罪を犯す前から、世界の基が据えられる前から、天において定まっていたということです。とすれば、だれがそれに敵対しようともそれを阻むことはできません。神はご自身が目指されたことを必ず成し遂げられます。

●「人がひとりでいるのは良くない」と言われた神は、アダムを眠らせ、そのアダムからエバを造られました。このことは、神がご自身の息子に花嫁を与えるという御旨を果たすためには、花嫁である教会が御子から造られなければならないということの「型」でした。つまり、花嫁である教会のすべては完全に御子自身のからだから出てくるものでなければならないということです。御子であるキリストから出たものでなければ、「助け手」としての資格はないのです。これが神の最初からあった神のご計画です。イェシュアがぶどうの木の幹と枝のたとえの中で、「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。・・・わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」(【新改訳 2017】ヨハネの福音書 15:4, 5 後半)と言われましたが、これはそのことを言わんとしているのです。

●一体となるためには「からだ」(בָּשָׂר)が不可欠です。教会が「キリストのからだ」と言われているのはそのためです。単にキリストの意志を遂行するための器官としての「からだ」ではありません。交わりのための「からだ」、一体となるための「からだ」です。それは「ふたりが一体となる」ために不可欠だったのです。**神の永遠のご計画(神のみこころ)は「ふたりが一体」となることによってはじめて実現し、成就することができるのです**。一方だけでは神のご計画を実現することはできません。それゆえ使徒パウロが「(・・である方に)、**教会において**、**またキリスト・イエスにあって**、栄光が、世々限りなく、とこしえまでもありますように。アーメン。」(エペソ 3:21)という祈りを記しているのは、そのことを明確に意識していたからです。

●ここで「教会において」、また「キリスト・イエスにあって」となっている点が重要なことです。では**イスラエル(ユダヤ人)**はどうなってしまったのでしょうか。ユダヤ人の位置づけはどうなるのかということです。実はここにも奥義があるのです。パウロはエペソ人への手紙 3 章で次のように述べています。

【新改訳 2017】エペソ人への手紙 3 章 6 節
それは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、
ともに同じ**からだ**に連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。

●ここでの「奥義」とは、「男」と「女」とが結婚によって一体となるということではなく、「イスラエル(ユダヤ人)」と「異邦人」とが共同の相続人となることで一体となるということが語られています。そのことをパウロは、「新しい一人の人に造り上げる」と表現しています。この「新しい一人の人」という概念はパウロ独自の表現ですが、キリストにあって「イスラエル」と「異邦人」の二つの民が「一つに」されることを意味しています(エペソ 2:11～16)。このことが実現されるプロセスにおいて、キリストの十字架の出来事が位置づけられているのです。これがパウロに啓示された奥義でした。

【新改訳 2017】エペソ人への手紙 3 章 8～9 節
8 すべての聖徒たちのうちで最も小さな私に、この恵みが与えられたのは、
キリストの測り知れない富を福音として異邦人に宣べ伝えるためであり、
9 また、万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現がどのようなものなのかを、
すべての人に明らかにするためです。

●驚くべきことに、**イスラエルと教会の歴史的な誕生は、万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現であった**と述べていることです。まだイスラエルも教会も誕生していない創造のはじめに、神のご計画においては、御子とその花嫁が一体となることがすでに定められていたということなのです。この奥義(神秘)を理解するために、もう一度、創世記(1～2 章)とエペソ人への手紙に目を向けたいと思います。

2.　人(男と女)の創造はキリストと教会とのかかわりの型であった

●このことはパウロが述べていることです。夫婦についての教えの中で、「ふたりが一体となる」ということは、「キリストと教会とを指して言っているのです」とあります。つまり、本体は「キリストと教会が一体となること」であり、「夫と妻のかかわり」はその本体の「型」であることを示しているのです。神の創造において、人間の創造は神のご計画の中心であることは明らかです。しかし、人間の創造も神の究極的な目的を実現する一つの「型」でしかありません。先にも述べたように、神の究極的な目的とは御子に花嫁を与えることです。その究極的目的を目に見える形で教えるために、神は人を「男」と「女」とに造られたのです。なぜ、人間には「男」と「女」が存在するのか。動物に「雄」と「雌」がいるようにその類(程度)のものなのか、否か。子孫を与えるための神の処置なのか、否か。その問いにどのような答えを出したとしても、おそらく不十分なものでしかないと思います。なぜなら、その答えは「奥義」として隠されているからです。しかしその奥義が開かれた者としてパウロは、「夫婦」というかかわりを通して、天にある「本体」について語ろうとしているのです。

(1) エバはアダムから出た存在(=「彼らはひとり」)

●創世記 1 章では、神が創造の冠として人を神のかたちに似せて創造された時、当初から「男と女とに彼らを創造され」ました。そして、それは神の目において「非常に良かった、はなはだ良かった」(「トーヴ・メオッド」**טוֹב מְאד**)のです。ここでの「良かった」というニュアンスの中には、神の喜び、神のご満悦が込められています。

●創世記 2 章 18 節では「人がひとりでいるのは良くない」と言われた神が、どのようにして人に「ふさわしい助け手」を与えられたのか、その**プロセス**(成り行き)が記されています。まず神がされたことは人に深い眠りをくだされたことです。「深い眠り」(「タルデーマー」**תַּרְדֵּמָה**)という表現も聖書においては重要です。それは「昏睡状態」を表すものですが、それは人が何もできない状態になることで、ある意味、「死」を象徴するものです。とはいえ、この時点ではまだ罪が入っていない状態で起こっている出来事です。ですから、死を象徴する「深い眠り」は罪に対する贖いを意味するものではありません。贖いではなく、いのちを与えるための「深い眠り」と言えます。

【新改訳 2017】創世記 2 章 21～23 節
21 神である【主】は、深い眠りを人に下された。それで、人は眠った。
主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた。
22 神である【主】は、人から取ったあばら骨を一人の女に**造り上げ**、人のところに連れて来られた。
23 人は言った。「これこそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。
男から取られたのだから。」

●人(アダム)に関する限り、それは土から造られた人です。しかし他方において、人(アダム)はキリストを予表しています。その証拠に「アダム」は「最初のアダム」、キリストは「最後のアダム」と呼ばれます。そして女が人(アダム)から造られた事実は、教会がキリストから造られることを象徴しています。そして、この教会こそキリストにとって「ふさわしい助け手」(花嫁)となるべき存在なのです。

●創世記 1 章 27 節にある人の創造においてもこの真理が語られています。

> 【新改訳 2017】創世記 1 章 27 節
> 神は**人**をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして**人**を創造し、**男と女に彼ら**を創造された。

●「神は人を」の「**人**」は単数形です。そしてその「**人**」が「彼ら」と複数形に変わります。ひとりの「人」が「男」と「女」とに造られたからです。神は「ひとりの人」を造られたのに、その「ひとりの人」が「二人」になっています。なぜなら、「男」と「女」とは「ひとりの人」(アダム)の中にいたからです。しかもアダム(男)はキリストの型です。そしてアダムから出てきたもう一人の女は教会の型です。「彼ら」とは、「キリストと教会」を予表しています。その本体(ご計画のマスタープラン)は天にありましたが、その影(コピー)が「男と女」とに創造されるという形で現わされたのです。

(2) 教会はキリストから出た存在

●ギリシア語で「教会」のことを「エクレーシア」(ἐκκλισία)と言います。それは「この世から呼び出された者」という意味ですが、このギリシア語は「教会」の真の本質を伝えていません。なぜなら、女が男から取り出されたように、教会はキリストから呼び出された存在ではなく、**取り出された存在**だからです。つまり、男の象徴であるキリストなしに教会の存在はなく、何の地位もなく、またいのちもありません。すべてはキリストにあって存在しているというのが「教会」が意味していることです。

●新約聖書で初めて「教会」という言葉が出てくるのはマタイの福音書 16 章 18 節ですが、そこではイェシュアが「わたしはわたしの教会を建てる」と言っています。この「**建てる**」という動詞はヘブル語では「バーナー」(בָּנָה)です。この動詞は創世記 2 章 22 節の人のあばら骨を女に「**造り上げる**」と同じ動詞「バーナー」(בָּנָה)です。つまり、マタイの福音書 16 章では「キリストがご自身によって教会を造り上げる」ことを意味しているのです。ひとりの女が人から取られたもので造り上げられたように、教会もキリストご自身から造り上げられなければならないのです。つまり、女が男から造られたことによって一体であるように、教会もキリストから造られたことによって一体なのです。女が人のように土からではなく、アダムの中にあるものによって造り上げられたように、教会もキリストのうちから出たものでなければならないのです。

●このことを知ることで、パウロが記したエペソ人への手紙の 1 章 1～14 節にある壮大な神への賛美の内容をはじめて理解することができるのです。この箇所は、キリストにある幼子には難しい箇所です。しかし神

のご計画の全体像を知り、神のキリストにある壮大なヴィジョンを知った大人たちには、この箇所がパウロの記した神への賛美の中でも、ひときわ際立つ驚くべき箇所として理解できるのです。この箇所の特長は「キリストにあって」という表現がしつこいと思われるほどに出てきます(以下の青色の部分がそうです)。これはパウロがあえて意識して使っているのです。

【新改訳 2017】エペソ人への手紙 1 章 1～14 節

① (　　)内は私の説明です。
②この手紙にある「**聖徒たち**」「**私たち**」「**あなたがた**」とは、「教会」(=キリストの花嫁)と同義です。
③黄色のマーカーは、神の永遠のご計画と意志決定を表わす語彙で、**「みこころ」「みむね」「ご計画」「目的」**といった語彙が含まれます。これを読まれる方がそれらの語彙を自分でも調べられるように原語表記しています。

1 神の**みこころ**(「セレーマ」θέλημα)によるキリスト・イエスの使徒パウロから、キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ。
2 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。
3 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天上にあるすべての霊的祝福(=予め定められた神のご計画とそれに付随する祝福)をもって私たちを祝福してくださいました。
4 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方にあって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。
5 神は、**みこころ**(「セレーマ」θέλημα)の**良しとすること**(「ユードキア」εὐδοκία)にしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子(=「養子」、しかし花嫁であれば父から見て子の立場にある)にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。
6 それは、神がその愛する方にあって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。
7 このキリストにあって、私たちはその血による贖い、背きの罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。
8 この恵みを、神はあらゆる知恵と思慮をもって私たちの上にあふれさせ、
9 **みこころ**の奥義を私たちに知らせてくださいました。その奥義とは、キリストにあって神があらかじめお立てになった**みむね**(「ユードキア」εὐδοκία)にしたがい、
10 時がついに満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。
11 またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。すべてを**みこころ**による**ご計画**(「プロセシス」πρόθεσις)のままに行う方の**目的**(=意志「ブーレー」βουλή)にしたがい、あらかじめそのように定められていたのです。
12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。
13 このキリストにあって、あなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞いてそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。
14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐこと(=相続財産)の保証(=手付金)です。このことは、私たちが贖われて神のものとされ、神の栄光がほめたたえられるためです。

●エペソ人への手紙 1 章 1～14 節を読んで、私たちは、以下の事柄は比較的理解して受け取ることができると思います。

①自分が神によってこの世の基が据えられる前から**選ばれていたこと**。
②**神の子どもとされたこと**。
③キリストにある血によって、**背きの罪の赦しを与えられたこと**。
④約束の聖霊をもって**「御国を受け継ぐ者」としての証印を押されたこと**。
⑤これらは**すべて神の恵みによること**。

●しかしそれ以外の事については特別な関心をもっていないことが多いのです。なぜなら、ここに書かれていることを、自分個人について書かれていると理解するからです。神の壮大なご計画が神の御子によって建てられて、教会がこの御子キリストから出たものであり、この方と永遠に一体となるという定めにあることに関心を持つことが少ないのです。神の「ご計画」「みこころ」「みむね」「目的」といった事柄に対して、より関心を抱くことが、キリストから出た花嫁の最大の関心事とならなければならないのです。

●パウロはエペソの教会の長老たちに語った訣別説教の中で、「神の恵みの福音」だけでなく、「御国の福音」(=神のご計画のすべて)について余すところなく知らせたと語っています(使徒 20:27)。パウロの関心は常に神のご計画とその成就でした。それはひとえに、事柄の源泉への関心と深く結びついているのです。教会の様々な問題以上に、その源泉がどこにあるのか、その究極的目的は何かということについて、いつも目を向けていたのです。私たちもそのような視点が必要です。私たちが学ぼうとしている「ブライダル・パラダイム」とはまさにそのことに関係するのです。

ベアハリート

●「結婚すること」の意義は、今日においても、またいつの時代にあっても、神のご計画の始まりとその究極的な目的という観点から見直されなければなりません。今日、神が制定された結婚が人間の思いによってますますゆがめられつつある時代です。一人の特定の人ではなく、自分が愛する人であれば何人とでも良いとする「自由婚」、あるいは同性者との結婚。また、19 世紀初頭から生まれた「フェミニズム」の思想などは、本来の神のご計画とは全く異なり、神のみこころに敵対するものであり、その背景には偶像礼拝と同じ霊が隠れています。その行き着く所がどのようなものであるかは神の歴史と預言の中にすでに啓示されています。もしも、花嫁なる教会がそのような時代精神を自らのうちに取り入れるならば、「教会」ではなくなってしまうのです。イエシュアが「わたしはわたしの**教会を建てる**(=造り上げる)」と言ったことばを、私たちは軽く考えてはならないのです。なぜなら、キリストの花嫁である教会は神のご計画の中枢にある事柄であり、「一体となる」という奥義がそこに隠されているからです。

〔2015.10.18〕
改定 2018/12/6